

## ウィリアム・スパーストウとウィリアム・ストロングの火薬陰謀事件説教 —「エズラ記」9章13節-14節をめぐる—

高橋 正平

### 1 ウィリアム・スパーストウの火薬陰謀事件説教

#### 1-1 はじめに

1605年11月5日に英国国民を驚愕せしめたジェームズ一世暗殺を図った国会爆破事件、いわゆる火薬陰謀事件が起こった。事件に激怒したジェームズ一世は以後毎年事件日の11月5日に火薬陰謀事件記念説教を行わせた。説教の目的は、事件の風化を防ぎ、合わせて事件を計画したジェズイットがいかに危険な教団であるかを国民に知らせ、同時にジェームズ一世王朝を強化することであった。その最初の説教はランスロット・アンドルーズによって1606年11月5日に行われ、以後現在にまで続いている。事件から39年後の1644年11月5日には貴族院と庶民院で4編の火薬陰謀事件説教が行われた<sup>(1)</sup>。貴族院では午前ウィリアム・スパーストウ、午後ジョン・ストリ克蘭ドがそれぞれ説教を行った。庶民院ではアンソニー・バージェスとチャールズ・ハールが説教を行っている。説教者は宗派は異なるがいずれもピューリタンである。1644年11月と言えば1642年8月に議会軍と国王軍の内乱勃発以来2年が経過していた。勝敗の行方が定かではないなかでの火薬陰謀事件説教である。本論では最初に長老派スパーストウの説教を取り上げるが、我々は次の二点について特に注意しなければならない。第一点は、説教でスパーストウが火薬陰謀事件をどのように扱っているかである。第二点は、進行中のピューリタン革命の観点からスパーストウの説教を論ずることである。スパーストウの説教は、火薬陰謀事件説教であるので彼はどうしても火薬陰謀事件を扱わざるをえないが、その論調はそれまでの事件批判の繰り返しの感が強い。スパーストウの説教がその力強さを増すのは彼がピューリタン革命に言及するときである。本論では最初にスパーストウが火薬陰謀事件をどのように批判しているかを考察し、次に1644年11月5日までの議会軍と国王軍との戦いを考慮に入れ、スパーストウの説教の真の狙いは火薬陰謀事件を論ずるよりはむしろピューリタン革命で議会軍を援護することにあったことを明確にしたい。

スパーストウから2年後の1646年、同じピューリタンのウィリアム・ストロングがやはり11月5日の火薬陰謀事件記念日に説教を行っている。ストロングはスパーストウと異なり独立派である。問題は両者が説教で同じ聖書の一節「エズラ記」9章13-14を取り上げていることである。ストロングが選んだ聖書の一節がスパーストウが選んだ一節と偶然一致したとは考えにくく、それは説教家が過去の説教を見れる立場にあったことを示唆している。「エズラ記」は、バビロン捕囚のイスラエル人がペルシャ王クロスの好意によりエルサレムに帰ることを許され、サマリア人の妨害を乗り越えて、神殿を再建したことを記しているが、その9章はイスラエル人の異民族との雑婚の報告から始まっている。エズラ

は雑婚の罪よりは雑婚の結果としての背教、そして雑婚によって神からイスラエル人は滅ぼされることを恐れたのである。13-14節ではイスラエル人の雑婚という罪を犯したにもかかわらず神は軽い罰を下してくれたのに、再び神の命令を破り、憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいものかどうかと神に問うている。「エズラ記」13-14節でエズラはイスラエル人の罪の深さを改めて神に告白し、神の許しを願っている。ストロングの火薬陰謀事件説教は厳密には火薬陰謀事件説教とは言えない説教である。ストロングは火薬陰謀事件を説教で論ずることはなく、その説教は神の慈悲を賞賛している説教である。本論ではストロングの説教は「火薬陰謀事件」記念説教か、説教の目的の真意は何か、そして最終的にその説教は火薬陰謀事件よりは英国の現状改革を訴える内容の説教であったことを論じていく。

## 1-2 「英国のすぐれた裁き」と「神のすぐれた慈悲の悪用」

スパーストウの説教は火薬陰謀事件を徹底的に論じた説教とは考えられない。むしろ彼の事件への熱意の希薄さは注目すべき点である。それは彼が説教に選んだ以下の「エズラ記」9章13-14節にも見られる。

And [Thou (the Lord)] hast given us such a deliverance as this: should we againe breake thy Commandements, and joyne in affinity with the People of these abominations? wouldst thou not be angry with us till thou hadst consumed us, so that there should be no remnant nor escaping?<sup>(2)</sup>

この一節はバビロン捕囚から帰還した捕囚民がユダを復興するにあたり指導的役割を果たしたエズラについての一節である。エルサレム到着後エズラはイスラエル国家の純粋性を取り戻すためにイスラエル人と異民族の女性との雑婚の解消に努めた。イスラエル人が異民族との結婚により先祖伝来の律法を破り、神に対して罪を犯したが、主はイスラエル人に罰を下さず、彼らを生き続けさせてくれた。これが「救出」である。火薬陰謀事件後の事件記念説教で英国国教会説教家が採った説教方法は説教の冒頭に挙げた聖書の一部を火薬陰謀事件に「適応」し、聖書の一節によって事件を糾弾することであった。上記の「エズラ記」を火薬陰謀事件に適応すればどうなるか。主によるイスラエル人「救出」は、火薬陰謀事件では主によるジェームズ一世「救出」となる。従来の説教家、特に英国国教会説教家は火薬陰謀事件説教で事件からのジェームズ一世の奇跡的救出を賞賛し、それに類似する一節を主として旧約聖書から選んだ。そしてイスラエル人が、彼らの救出を主によるイスラエル人への特別な慈悲の結果であると考えたのと同様に英国人もジェームズ一世救出は神の王への特別な慈悲の結果であると考えた。ところが「エズラ記」の救出には劇的な緊迫した救出は描かれていない。このことはスパーストウが火薬陰謀事件におけるジェームズ一世救出をとりわけ重要視していないことを示していると思われる。ここで問題になるのは、スパーストウは火薬陰謀事件をどのようにとらえているかである。それは彼の説教のタイトルを見れば理解できる。説教のタイトルは“ENGLANDS EMINENT JUDGMENTS, caus'd by the Abuse of GODS EMINENT MERCIES”である<sup>(3)</sup>。「英国の

すぐれた裁き」、「神のすぐれた慈悲の悪用」とは何を意味するのであろうか。これはスパーストウが「エズラ記」から得た以下の“doctrine”（教理）から知ることができる。

That the abuse of eminent mercies and deliverances, provokes God to inflict eminent judgements, and many times a total and finall ruine<sup>(4)</sup>.

神は「すぐれた慈悲と救出」を与えるが、それらを悪用すると神から「すぐれた裁き」を受けることになり、神が「すべての最終的な破滅」をもたらす。これが「エズラ記」から得られる「教訓」であるとスパーストウは考える。スパーストウの説教のタイトルは「神のすぐれた慈悲の悪用によって引き起こされる英国のすぐれた裁き」である。スパーストウは「エズラ記」の一節から英国へ論点を移している。説教のタイトルを火薬陰謀事件との関連で考えると「神のすぐれた慈悲の悪用」はジェズイットによる国会爆破未遂事件であり、「英国のすぐれた裁き」とはその事件を未遂に防いだジェームズ一世の裁きである。このタイトルから判断すると我々はスパーストウによるジェズイット及びその背後にいるカトリック教会批判とジェームズ一世賞賛を期待するが、説教は事件とカトリック教会批判だけに終わり、ジェームズ一世賞賛は見られない。本来ならば「英国のすぐれた裁き」は「ジェームズ一世のすぐれた裁き」となるべきであるが、スパーストウはジェームズ一世という表現を避けている。王政批判の態度をとるピューリタンからすればそれは当然のことかもしれない。長老派はチャールズ一世との妥協を目指し、王に対してはそれほどの拒否反応を示していないが、スパーストウの説教にはジェームズ一世は見られない。いずれにせよ「エズラ記」の火薬陰謀事件への適応は強力なインパクトを我々に与えない。従来の火薬陰謀事件で扱われる聖書の一節はもっと劇的であった。それに比べると「エズラ記」におけるイスラエル人救出は劇的さを欠いていると言わねばならない。それよりも問題なのはスパーストウがなぜジェームズ一世の名を出さないのかである。この疑問は、スパーストウの説教の意図は火薬陰謀事件やジェームズ一世を論ずることよりも他にあるのではないかという疑問をわれわれに抱かせる。ここで忘れてならないのはスパーストウの説教は断食日説教であるということである<sup>(5)</sup>。断食日説教は、神が英国に対して永続的に恩寵を示してくれるように神に懇願する説教で、ピューリタン革命が勃発して以来頻繁に行われた説教である。その説教はピューリタン革命に際し議会軍が勝利のために神の援助を請うことを訴えるが、そのためにピューリタンは断食を行い、神に対してへりくだりの態度を示すことを人々に要求した。この断食日説教の背景を考えるとスパーストウの説教は火薬陰謀事件日説教でありながら実は火薬陰謀事件を論じるのではなくピューリタン革命を念頭においている説教であることがわかる。一見するとピューリタン革命とは無縁な印象を与えるスパーストウの説教はピューリタン革命と密接に関係している説教なのである。説教の序文でスパーストウは神と教会はこれまで以上に貴族院議員の援助を必要としており、彼の説教の趣旨は神と教会の援助へと貴族院議員を指導することであると述べている<sup>(6)</sup>。これはチャールズ一世支持の国王軍を念頭においての発言である。つまりピューリタンが革命に勝利し、チャールズ一世を打倒するためには貴族院議員の更なる協力が必要であることへの訴えなのである。では、神と教会を守るには具体的には何をなすべきか。それは以下の3点である。

- (1)神から受けた偉大なすぐれた慈悲を感謝して認めること。
- (2)神から与えられた慈悲と救出を神への感謝なしで悪用しないこと。
- (3)神からの慈悲と救出の悪用は神からの厳しい罰を招くことの容認。<sup>(7)</sup>

ここで重要なのは神の慈悲への感謝である。神の慈悲を忘れなければ神は我々を救済し、逆に神の慈悲を悪用すれば神の罰が我々に下る。これは「エズラ記」においても火薬陰謀事件においても見られたことである。「神のすぐれた慈悲」という表現は説教の至る所に頻出するが、なぜかスパーストウはジェームズ一世への神のすぐれた慈悲を論ずることはない。これは、スパーストウが火薬陰謀事件説教で賞賛の対象となるべきはずのジェームズ一世には格別関心がなかったことを示している。この理由については次に明らかにするが、ジェームズ一世への関心欠如と共にわれわれの興味を引くのはスパーストウの火薬陰謀事件についての記述である。その記述を見てもスパーストウの事件への関心の度合いの薄さが理解できる。

### 1-3 スパーストウの火薬陰謀事件観

スパーストウは説教で火薬陰謀事件については多くを語らない。その火薬陰謀事件説教は火薬陰謀事件を扱いながらも彼の事件そのものへの糾弾には疑問が感じられる。それは、スパーストウの火薬陰謀事件観はそれまでの事件に対する見方を踏襲している印象を与えるからである。例えばスパーストウは、火薬陰謀事件について次のように言う。

It [The deliverance of King James I] is a deliverance upon the head of which may be truly written: such as the present age may admire; such as posterity will scarce believe; such as story cannot parallel. And therefore ought the memory of it to be deare unto every one, that would not so farre gratifie the Papists, as by the forgetting of Gods goodnesse, to silence and bury this their wickednesse, which should stand upon record to their perpetuall infamy. Doe but looke a little into the blacknesse of the conspiracy, and you shall thereby best discern the transcendency of the deliverance; that serving unto it as darke and muddy colours unto God, which are oftentimes the best ground to lay it upon<sup>(8)</sup>.

スパーストウの火薬陰謀事件への見方に格別独自な見解は見られない。事件からのジェームズ一世脱出への感嘆、歴史上類を見ない事件、事件の邪悪さ、陰謀の陰険さ等が記されているが、これらの表現に格別新しさはない。スパーストウは従来の火薬陰謀事件に見られた語句を使用して事件を批判しているにすぎない。最も奇異なのは、スパーストウが火薬陰謀事件について“the Gunpowder Plot”という語句を一度も使用していないということである。上記の引用では“the conspiracy”が火薬陰謀事件を表しており、スパーストウは幾度か説教でその表現を使用するが、“the Gunpowder Plot”という表現は説教には見られない。スパーストウは更に次のように火薬陰謀事件について言葉を続ける。

Was there ever any wickednesse in all the ages that are past, which by the help of story we may come to the knowledge of, that did equall this, in cruelty, malice, and revenge? Or can you thinke that generations to come, are ever like to travell with such a monstrous conception and birth as this was? may we not truely say of it, what the *Historian* spake in another case...That if it had not been recorded in our own annals; posterity might have thought it to have been rather fabulous, then true?<sup>(9)</sup>

この一節も上記の一節と内容的には変わらない。“wickednesse”、“cruelty, malice, and revenge”において火薬陰謀事件に匹敵する事件はなく、年代記に記録されなかったら後世は事件を“fabulous”と考えたであろうほど空前絶後の事件であるとスパーストウは言うが、これらの表現も使い古された表現である。スパーストウはこの他にも“this bloody conspiracy”<sup>(10)</sup>とか“this wickednesse is never like to finde an exact parallel.”<sup>(11)</sup>とか述べて事件の凶悪さを指摘する。もしスパーストウの火薬陰謀事件観に何か新しさがあるとすればそれはスパーストウが事件を獅子の洞窟に投げ込まれたダニエルと比較している点である。スパーストウがダニエルと火薬陰謀事件を比較したのは火薬陰謀事件がダニエルの事件よりもはるかに凶悪な事件であることを訴えたいためであった。たとえばスパーストウは両者を比較して次のように言う。

*Daniels* danger sprang out of *Babylon*: from a combination of Princes, and great ones, that had there plotted his ruine. so did our danger arise from Rome, which is spirituall *Babylon*:<sup>(12)</sup>

ダニエルの事件は個人が引き起こした事件であるが、火薬陰謀事件はそれよりもはるかに規模が大きく、事件の背後にはローマ・カトリック教会が潜んでいた国家的な事件であった。スパーストウの火薬陰謀事件批判はまた、カトリック教会への批判ともなり、事件の残虐さよりも組織的なカトリック教会が事件の犯罪に加担していることを糾弾している。だからスパーストウは次のように言うのである。

...this [the Gunpowder Plot] was the designe of those who stile themselves of the order of Jesus, and wouldst be esteemed religious above others; and this is the thing which accents their wickedness, they act murder under the vizard of holinesse, which makes their iniquity to be *Scarlet*, what ever colour their coats were of.<sup>(13)</sup>

火薬陰謀事件は他の人よりも宗教心に厚いと思われるジェズイット教団に企てられ、彼らは神聖という仮面の下で殺人を犯している。このようにスパーストウは火薬陰謀事件をダニエルの事件と比較し、ダニエルの事件を凌ぐ火薬陰謀事件の凶悪さを強調する。この比較はこれまでになかった比較で火薬陰謀事件の残忍性を訴えようとしている。更に事

件の背後にいるローマ・カトリック教会批判へとスパーストウは論を移すが、そこには“the Gunpowder Plot”なる表現も事件の被害者ジェームズ一世の名も出てこない。“the matchlesse salvation and deliverance”<sup>(14)</sup>が「この日（11月5日）」に神によって国全体に与えられ、そこに神の“superlative and transcendent mercies”<sup>(15)</sup>が現れたとスパーストウは言う。事件が英国の歴史上類を見ない凶悪な事件で、そこには神の慈悲が表れたという考えは事件直後の国会演説で事件を批判した際のジェームズ一世の表現で<sup>(16)</sup>、以後ジェームズ一世支持の英国国教会説教家達は事件の凶悪さと神の慈悲を繰り返している。スパーストウの事件の見方は従来の事件観に従っていると言える。事件計画者の“wickedness”<sup>(17)</sup>、事件の“conspiracy”<sup>(18)</sup>、人間の理解を超えたジェームズ一世救出（the transcendency of the deliverance）<sup>(19)</sup>、事件計画者の“cruelty”、“malice”、“revenge”<sup>(20)</sup>という語句が見られるが、これらはすべてそれまでの説教家によって使用されている語句である。また、事件の計画者であるジェズイットが所属するカトリック教を批判することも説教の定番であるが、スパーストウもカトリック教徒への批判を忘れはしない。しかし、その批判はそれまでによく知られた常套的な批判となっている。例えばスパーストウは、ローマ教皇について次のように言う。

*...the Popes temporall jurisdiction over Princes; of his power to dispose all oathes and tyes of allegiance; of his infallibility, of subjection to him absolutely necessary to salvation, &c. but treasons and rebellions against that State and people, that maintaine a contrary religion unto them.*<sup>(21)</sup>

教皇の君主への世俗的支配権、すべての忠誠の誓いときずなを解消する教皇の権限、教皇の不可謬性、救済に絶対的に必要である教皇への服従、しかしカトリック教と相反する宗教を維持する国家や国民へ反逆と反乱を扇動する教皇、世俗化しすぎた教皇権への批判をスパーストウは行っている。あるいはカトリック教会の「迷信的行為と偶像崇拜」<sup>(22)</sup>についても言及するが、これらはカトリック教会批判の際には必ずと言ってよいほど使用された表現である。火薬陰謀事件の凶悪性批判とカトリック教会批判は説教のお決まりのテーマの一つであったが、スパーストウの両者への批判に目新しさはない。ただ従来の批判を踏襲している感が強い。スパーストウが火薬陰謀事件をそれほど重視していないことはその説教の手順を見ても理解できる。従来の英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教は以下の手順に従っていた。

- (1)火薬陰謀事件と類似した事件の聖書からの選択
- (2)事件の凶悪さ
- (3)ジェームズ一世の奇跡的な事件からの救出
- (4)説教に選んだ聖書の一節の事件への適応
- (5)事件を未然に防いだジェームズ一世への賞賛
- (6)ジェームズ一世救出に対して神への感謝

スパーストウの説教の手順を見るとこの手順を踏まえているのは(1)(2)(6)である。しかも(6)

はほんのわずかしか触れられていない。最も重要な点は、すでに指摘したようにジェームズ一世の個人名が全く現れていないということである。(3)のジェームズ一世の奇跡的な「救出」についてもスパーストウは言及するがジェームズ一世の名前は見られない。既に引用したジェームズ一世の救出に言及した “It [the deliverance of James I] is a deliverance upon the head of which may be truly written.”<sup>(23)</sup>での “the head” とは誰を指すのかは明白である。それは英国国教会説教ならば “James I” と書いたであろうが、スパーストウはそれを避けている。しかもその回避は意図的である。あるいは既に指摘した説教のタイトルにもジェームズ一世という表現を避けられている。これはスパーストウがピューリタンであることを考えれば容易に理解できるであろう。ピューリタン革命の目的は絶対王制に固執するチャールズ一世の打倒である。父のジェームズ一世同様王権神授説を頑なに信じ、絶対王制死守に奔走するチャールズ一世は共和制を説くピューリタンの理念に反する人物である。チャールズ一世打倒により新しい社会建設を目指すピューリタンにとってジェームズ一世は賞賛の対象とはなりえない。ジェームズ一世賞賛欠如はピューリタン説教家に共通したもので、スパーストウが説教を行った日の午後に貴族院で火薬陰謀事件説教を行ったストリ克蘭ドも説教のなかで事件へは2回しか言及せず、ジェームズ一世には一度も言及していない<sup>(24)</sup>。スパーストウの説教の中にジェームズ一世の名前が見られないことと関連するのは説教に選んだ聖書の一節の事件への「適応」である。説教に選んだ「エズラ記」9章13-14節での「救出」は罪を犯したイスラエル人を主が生き続けさせていることである。ところがスパーストウは「エズラ記」を火薬陰謀事件に適応していない。「救出」は「エズラ記」の場合は異民族と結婚したイスラエル人の主による「救出」であるが、火薬陰謀事件では主によるジェームズ一世「救出」である。ところがイスラエル人救出がジェームズ一世救出へと適応されるとジェームズ一世は神の選民イスラエル人となり、ジェームズ一世の神格化を容認することになる。火薬陰謀事件に相当する事件はイスラエル人と異民族の結婚である。その雑婚を解消するエズラはジェームズ一世となる。火薬陰謀事件実行者のジェズイットに相当する人物は「憎むべきわざを行う民」であるが、この民にはジェズイットのような物理的凶悪さはない。彼らの主への裏切りは精神的な凶悪さである。このように「エズラ記」を火薬陰謀事件に適応するとピューリタンにとっていくつかの不都合が生じかねない。何よりもその適応はジェームズ一世の神格化を助長することになる。だからスパーストウはあえて「エズラ記」の一節を火薬陰謀事件へ適応することには慎重だったのである。スパーストウの説教は火薬陰謀事件記念説教であったがその論点は「エズラ記」を基にして火薬陰謀事件を論じることではなかった。火薬陰謀事件の主役はジェームズ一世であり、ピューリタンとしてのスパーストウはジェームズ一世賞賛になる恐れのある火薬陰謀事件をまともに取り上げることはできなかった。それならばスパーストウの説教の真の意図はどこにあったのであろうか。われわれはスパーストウの説教が行われた1644年11月5日以前のピューリタンを取り巻く情勢を考慮する必要がある。その情勢を理解して初めてスパーストウの説教の真意が明らかになる。

#### 1-4 火薬陰謀事件説教とピューリタン革命

スパーストウの説教は表面的には火薬陰謀事件記念説教であり、それは当然のことなが

ら事件への非難が中心となるべき説教である。しかし、この説教は単なる従来の火薬陰謀事件説教で終わることはない。説教の真意を理解するためにわれわれはこの説教が行われた1644年11月5日以前の英国社会に眼を向けなければならない。そうすればスパーストウの説教は単なる火薬陰謀事件説教ではないことが明らかになる。1644年11月5日までにピューリタン革命は4年を経過していたが、スパーストウの説教はピューリタン革命時におけるピューリタン議会軍と国王軍との戦いを抜きにしては考えられない説教である。両軍の戦いを説教から排除することはこの説教が有する真の狙いを見逃すことになる。とすると問題となるのは説教のタイトルである。説教のタイトルは“ENGLANDS EMINENT JUDGMENTS, caus'd BY the abuse of GODS EMINENT MERCIES”であるが、それには二つの意味があると考えられる。火薬陰謀事件説教として見た場合「英国のすぐれた裁き」は火薬陰謀事件が未然に防がれたことを意味する。「神のすぐれた慈悲の悪用」の「神のすぐれた慈悲」は、英国がこれまで神から受けてきた慈悲を意味し、その「悪用」とはジェズイットによる火薬陰謀事件である。1644年11月5日以前のピューリタン議会軍と国王軍との内乱との関係からタイトルを解釈すると「英国のすぐれた裁き」は国王軍との戦いを通しての議会軍の王制打倒決断の裁きである。「神のすぐれた慈悲の悪用」の「神のすぐれた慈悲」はこれまで英国を支えてくれた神の慈悲であり、その「悪用」とはチャールズ一世の恣意的な専制政治である。このようにスパーストウの説教には二つの意味が考えられるが、問題は説教には議会軍と国王軍との戦いに言及する箇所があるのかである。これについては一見すると見落としがちであるが、説教を注意深く読むとスパーストウは革命に言及していることが理解できる。例えばスパーストウは次のように言っている。

True it is, God hath given us of late some revivings, which we may justly looke upon as earnest & pledges of future mercy<sup>(25)</sup>;

スパーストウは「神がわれわれに最近いくつかの復活を与えてくれたことは真実である。それをわれわれは当然のことながら未来の慈悲の前兆と保証と見なすことができる」と言うが、「最近」とはいつのことであるのか。「いくつかの復活」とは何を意味しているのか。この一節は議会軍と国王軍との戦いに言及している一節である。1644年11月5日以前に両軍が戦った「最近」とは10月27日である。「いくつかの復活」は敗色濃厚な国王軍との戦いからの議会軍の復活である。10月27日には議会軍と国王軍との戦いがニューベリーで行われている。その戦いはコーンウォールでの勝利後引き揚げるチャールズ一世軍を議会軍がニューベリーで阻止しようとした戦いであった。議会軍は国王軍の二倍の勢力を有しながらも指揮統一を欠き、議会軍司令官マンチェスター伯 (Earl of Manchester) は国王軍追撃を強硬に主張したクロムウェルの要望に耳を傾けず、最終的に国王軍へ決定的な攻撃を加えることをしなかった。いわゆる第二次ニューベリーの戦いである<sup>(26)</sup>。厳密に言えばこの戦いは「いくつかの復活」の一つとは言えないだろうがスパーストウには議会軍の士気を鼓舞するためにあえて「いくつかの復活」の一つとしている。1644年には他にも議会軍と国王軍との戦いが繰り返されたが、厳密な意味で「いくつかの復活」の一つに近い戦いは1644年7月2日のヨーク郊外でのマーストンムーアの戦いである。それはヨークで国王軍が議会軍に降伏し、その結果として議会軍が北部での勝利を得ることになった戦い



である。マーストンムーアの戦いが「いくつかの復活」に符合する戦いであるが、「最近」という表現からは遠い。とすればスパーストウは第二次ニューベリーの戦いを「いくつかの復活」と考えていたことは疑いえない。この他にも内乱に言及していると思われる箇所がいくつか見られる。例えば、以下でスパーストウは“so Noble a work”というが、それが「革命」であることは明白である。

This I speake, Right Honourable, that you whom God hath called to be principall instruments in so Noble a worke, as the laying of the first stone of a blessed reformation, would not give over, and sit down discouraged, when you meet with opposition and scorne from such, who are apt to deride the meannesse and simplicity of Gods Ordinances,...<sup>(27)</sup>

「祝福された改革」はピューリタン革命であり、「反対と嘲笑」はチャールズ一世派からのピューリタンに対する「反対と嘲笑」である。スパーストウは「揺るがぬ決意をもって神の大義のために立ち上がる」ことを貴族院議員に訴えている。説教の序文には以下の言葉がある。

...those whose eyes God hath opened to judge right, they see that those men are both the best and greatest, whom God is pleased to betruest with the richest opportunities of worke and service. With such blessings, Right Honourable, God at this time hath abundantly enriched you above others, who stand continually engaged in such publique service,...O therefore be entreated to imploy and lay out your selves for God and his Church, which stands more in need of your helpe and assistance then ever<sup>(28)</sup>;

“worke and service” は1644年11月5日を考慮に入れると“worke” はピューリタン革命への言及であり、革命に従事することは神への奉仕ともなってくる。同様に“publique service” も革命を通しての公衆への奉仕である。スパーストウは貴族院議員に対して更なる革命への支援を訴えている。次の引用文でスパーストウは「貴族院議員は、神の真実を高慢な横柄な敵の不純な足によって踏みつけさせた」<sup>(29)</sup>と言うが、「高慢な横柄な敵の不純な足」、「神の真理に反抗した人たちが」がチャールズ一世派を指していることは言うまでもない。

...for his [God's]truth [you=the Lords] have not beene valient; but have suffered it to be trampled upon by the impure feet of proud and scornfull enemies, having neither a tongue to plead for it, nor heart to oppose the insolencies of such, who have risen up against it. O therefore lose not the honour of so precious an opportunity as God hath put into your hands, by any sinfull lukewarmness, and remission of your affection and love to God; .<sup>(30)</sup>

これはこれまで劣勢であった国王軍との戦いに対して強い意志と神への愛をもって臨むようにというスパーストウの訴えである。スパーストウの説教では国王軍との戦いが強く意識されている。以下での“the fist of wickednesse”と“the Sword of justice”には注目する必要がある。

...if they [men] dare to smite with the fist of wickednesse, doe you dare to smite with the Sword of justice<sup>(31)</sup>;

「悪のこぶし」で強打するのは国王軍で、「正義の刃」で強打するのは議会軍である。ピューリタン革命は「悪」と「正義」の戦いであり、スパーストウからすれば「正義」が「悪」に屈することはありえない。次のスパーストウの言葉は明らかに内乱を念頭においた発言である。

O therefore if in these sad and distracted times, you ever looke to be partakers of any ample testimonies of Gods favour, to share in any eminent mercy and salvation from heaven above others; indeavour to winde up your faith to an high pitch: beleieve above hope, against hope; above discouragements against discouragements:...let faith say, God is still one and the same, as able to helpe as ever, as willing to helpe as ever. And when you can thus honour God with your faith, God will certainly recompense you with the fulnesse of his mercy<sup>(32)</sup>.

「これらの嘆かわしい狂気のような時代」とは国王軍との内乱の時代である。しかし、ピューリタン議会軍はそれでも神からの慈悲と救済に与っており、スパーストウは信仰によって神を賛美すれば神の慈悲による報いがあることを強調する。これは国王軍とは違い、議会軍には神への信仰による神からの援護があることを言っているのである。この神の援護があれば国王軍との戦いで議会軍が敗れるはずはない。またスパーストウは次のようにも言う。

Then God whose power is perfited in weaknesse, wrought such a deliverance, as is deservedly recorded among the chiefe of miracles: making the sea to be Israels path to Canaan, and the Egyptians tombe and grave to bury them in destruction. And indeed, though calme and prosperous times may most suit with the desires, and beauty of the Church: yet extremities are the onely foyle to set off Gods power and love in their full lustre: as times that are plaine and even are best for the liver; but times that are up-hill and downe-hill, full of changes and vicissitudes, are best for the writer.<sup>(33)</sup>

“weaknesse”とは議会軍が国王軍との戦いで劣勢にあるときであり、そのようなときに神は奇跡中の奇跡に記録される救出を行ってくれる。これは明らかに国王軍との戦いで議会軍の行き詰まりを示しているが、内乱という「難局」にあつてこそ神はその愛と力に

よって議会軍を擁護してくれることをスパーストウは訴える。今はまさに「登り坂、下り坂であり、変化と浮き沈みに満ちている」時代であるが、その苦難の時代こそ書き手にとっては最も良い時代であるとスパーストウは言う。「書き手」とは革命の勝利を信じて止まないピューリタンであるが、ピューリタンにとって苦難を経て初めて勝利が訪れるのである。あるいは、

Former expeiences of Gods rich goodness unto us are alwaies to be improved to our support in present difficulties, and in every strait we should use them, as *Elishia* did *Elijahs* mantle, *2 King.* 2.14. who being to passe over *Jordan* smites the waters with it, saying *Where is the Lord God of Elijah?* we should say, Where is the God whose wisdom was as a pillar of fire unto us, when our own counsels were as a darke cloud that gave no light? where is the God, whose power was victory unto us, when our arme was weake, and our hopes faint? him we will trust, and cast our selves upon: else, if in every new difficulty we suffer our hearts to sinke and die away, as if we had never knowne any thing of God in troubles and dangers;<sup>(34)</sup>

“present difficulties” は1644年11月5日現在においてピューリタンが直面している苦境である。“our own counsels were as a darke cloud that gave no light.”<sup>(35)</sup>も出口の見えないピューリタンの国王軍との戦いへの言及である。また、貴族院議員に対しての“be eminent in your zeale for publique reformation.”<sup>(36)</sup>での「社会全体の改革」はピューリタン革命である。その「社会全体の改革」についてスパーストウは次のように言う。

It' [public reformation] s a worke which in its perfection, is full of glory, and beauty; but in its beginning and infancy, full of difficulty: a worke whose top-stone is brought forth with shoutings; but its foundation laid with discouragement and opposition; and therefore requires such a measure of zeal and affection in all who are builders,...<sup>(37)</sup>

社会改革の初めにおける阻止と反対はチャールズ一世派からピューリタンに対するもので、「建設者」はピューリタンである。ここでの「社会改革」はピューリタン革命であることは言うまでもない。それは、革命はその初めにおいては困難を伴うがあきらめずに最後まで戦えというスパーストウのピューリタンへの激励となっている。「崇高な仕事」であるピューリタン革命に際し、他人の暴力や激怒を恐れるなどもスパーストウは言うが、「他人の暴力や激怒」は国王軍からのものである。「改革」については次の表現もある。

...in these reforming times be eminently zealous, and full of courage in every concernment of God, and his Church.<sup>(38)</sup>

「これらの改革の時代」はピューリタン革命の時代で、スパーストウは革命において勇気ある行動を訴える。また、以下ではピューリタン内部の独立派以外の様々な宗派が現れた

結果、ピューリタン内部での意思統一が困難となり、ピューリタンの団結心が弱体化することへの危惧の念をスパーストウは表明している。

...be eminently in your [the Lords'] zeale for reformation, in suppressing of those monstrous births of opinions which every day multiply, to the shaking of the faith of the weake, to the perverting of such as were hopefull, and the strengthening of the hands of others in their iniquities.<sup>(39)</sup>

また、以下でもスパーストウはピューリタン内部での「分裂」が革命の将来へ悪影響を及ぼすことを指摘している。

how will division in judgements and ends, in such a Body as yours [the Lords'] quickly prove prejudiciall not to your selves onely, but to the whole Kingdome for whose good you are now met? O therefore let me beseech you, that laying aside your owne interests (which usually are the roote and spring of division) you would have the glory of God in your eye, who hath called you to many and weighjty services;<sup>(40)</sup>

でもスパーストウはピューリタン内部での「分裂」が革命の将来へ悪影響を及ぼすことを指摘する。私利私欲を捨てて初めて神の栄光が手に入れることができる。また、貴族院議員の団結心を訴え、内乱で混乱する英国の現状を“a reeling and tottering Kingdome”<sup>(41)</sup>と表しているが、「ふらつく、よろめく王国」はまさしく国王軍との戦いで決着のつかない1644年11月5日の英国の現状である。その「ふらつく、よろめく王国」でピューリタンは“the Saviours of Israel, and the repairers of its breaches”と呼ばれるのである。スパーストウは、戦いの行方が不透明な1644年11月5日現在において議会軍に一致団結をもって国王軍と戦うようにと訴える。

...so you [the Lords], though the glory of your House [of the Lords] be not so great as formerly, nor your number so many; may yet, if you aime all at one common White, and make the publique good, without respect to private interests, to be the results of your counsell, effect more and greater things for Gods glory, and the Kingdomes happinesse, then ever yet have been done.<sup>(42)</sup>

「一つの共通の白」とは国王軍打破であり、「私利に関係のない公共の利益」とはチャールズ一世王朝崩壊後の英国国民全体の「利益」である。

このようにスパーストウの説教の随所にはピューリタン革命への言及が見られる。スパーストウにとって火薬陰謀事件の主役たるジェームズ一世は眼中にない。彼の関心はただ一つ、いかにして進行中の革命でピューリタンを勝利に導くかである。当日午後の説教ではストリ克蘭ドは議会軍と国王軍との戦場にも言及し、ピューリタン革命でのピューリタンの勝利を確約した<sup>(44)</sup>。それはピューリタンには絶えず神の援護があるという主張

に依っていた。スパーストウの説教でも彼は盛んに「神のすぐれた慈悲」や「神の祝福」を繰り返し、神の慈悲や祝福によって議会軍は革命において勝利すると貴族院議員に確約している。火薬陰謀事件を論じるときのスパーストウに熱意は感じられないが、国王軍との戦いを論ずるときのスパーストウはピューリタンとして強い決意を見せる。スパーストウの説教の冒頭に掲げた「エズラ記」における「救出」は革命における窮状からの議会軍の「救出」をも示唆する「救出」である。その意味では火薬陰謀事件説教は単なる記念説教ではなかったのである。

### 1-5 むすび

断食は本来は国家が危機に直面していた際に行われたが、それ以外にも記念日や勝利や救出への感謝日に際しての断食もあり、それと共に説教が行われた。後者の説教には国王即位、火薬陰謀事件、及びエリザベス女王即位のそれぞれの記念日に際しての説教があり、スパーストウの説教は言うまでもなく火薬陰謀事件記念説教である。重要なことは長期議会の指導者たちは革命の戦術的戦略的の目的のために説教を利用したということである<sup>(44)</sup>。それゆえに我々はスパーストウの火薬陰謀事件説教を単なる火薬陰謀事件説教としてではなく、説教が行われた1644年11月5日現在のピューリタンが直面していた国王軍との戦いをも考慮に入れる必要のある説教として見なさなければならない。スパーストウは火薬陰謀事件だけを扱うことはできない。なぜなら火薬陰謀事件だけを扱えばその説教は事件を計画したジェズイット糾弾で終わるだけでなく、事件の最大の被害者となるはずだったジェームズ一世賞賛の説教となり、最終的にはジェームズ一世王朝継承者のチャールズ一世王朝存続を認めることになるからであった。確かにスパーストウは説教で火薬陰謀事件の凶悪性や事件の背後にいたカトリック教会を批判しているが、その批判は従来の批判の反復にすぎず、その批判に彼の気迫は感じられない。それは、スパーストウの説教の真の狙いは火薬陰謀事件を扱うことではなく、革命においてピューリタンを鼓舞することにあったからである。このように考えると1644年11月5日までの議会軍と国王軍との戦いがいかなる状況にあったかがスパーストウの説教を読み解く上で重要な背景となっていることが理解できる。それまでの議会軍の戦況は必ずしも議会軍に有利に展開してはいなかった。ピューリタンが「聖戦」とみなした国王軍との戦いは一進一退を続け、先行き不透明な様相を呈していた。翌1645年6月14日のネスビーの戦いでクロムウェルが国王軍に対して決定的な勝利を得て初めて内乱は終結に向かうが、1644年11月5日までは議会軍、国王軍のいずれが勝利を得るのかはまだ不透明であった。議会軍と国王軍との熾烈な戦いを考慮するとスパーストウの火薬陰謀事件説教は従来と同じ火薬陰謀事件説教としては論じることはできなくなってくる。火薬陰謀事件記念説教の場を借用し、スパーストウは聴衆に対して革命への檄を飛ばすのである。内乱で苦戦を強いられているなかで火薬陰謀事件の凶悪さ、残忍さを聴衆に訴えてもそれは強烈なインパクトとはならない。焦眉の急は内乱である。貴族院議員も火薬陰謀事件だけについての説教を期待していたわけではなかったであろう。貴族院に呼ばれた説教家たちに課せられた任務の一つは革命についての宣伝であり、革命の展望であり、最終的にはピューリタンの革命における勝利を聴衆に確約することであった。特別なことがない限り、国会では一般人も説教を聞くことが許され、

筆記も許された<sup>(45)</sup>。火薬陰謀事件説教を聞きに来た一般人の目的はジェームズ一世救出劇の説教ではあるまい。彼らは貴族院議員よりはるかに現実的な一般人であった。理論や理念よりも英国の現状に格別な関心を抱いていただろう。彼らの説教への期待もやはり革命についてであった。火薬陰謀事件をのみ論ずれば当然のことながら事件の主演のジェームズ一世への賞賛も論じなければならない。ジェームズ一世はピューリタンにとっては天敵である。火薬陰謀事件を取り上げたスパーストウの意図は事件に現れた事件への神の関与、神の慈悲である。その神の慈悲が議会軍と国王軍との戦いでも現れ、それが最終的には議会軍を勝利へ導いていく。スパーストウが聴衆に強く訴えたかったのはまさしく「神の慈悲」であった。火薬陰謀事件とピューリタン革命を結びつけているものはこの「神の慈悲」である。スパーストウの説教は火薬陰謀事件を扱いながらも実は革命において議会軍を強力に援護する説教であった。ともすれば議会軍は国王軍に敗れるかもしれない。その不安を払拭する必要がピューリタンのスパーストウにはあった。そのためにスパーストウは貴族院での説教を要請されたのである。スパーストウの説教の真の狙いは革命の勝利の確信を聴衆に与えることにあったと言っても過言ではない。スパーストウは、戦いはピューリタンにとって決して不利な状況にあるのではなく、むしろ勝利へと進んでいることを貴族院議員に訴えたかったのである。国王軍との戦いの結果はピューリタンにとっては革命が成功かを意味する。英国国教会説教家だったら事件だけを扱い、カトリック教会を批判し、ジェームズ一世の陰謀事件からの救出とジェームズ一世賞賛そして神の慈悲を訴えればそれで十分だった。しかし、ピューリタン説教家にとってはそれだけでは不十分だった。彼らには火薬陰謀事件よりも重大な国王軍との戦いが眼下にあった。新しい国家建設のためには国王軍との戦いにはどうしても勝利しなければならず、そのためにピューリタン説教家、スパーストウは火薬陰謀事件説教を利用し、ピューリタンの革命への後押しを行ったのである。今流に言えばアジの説教の感もなきにしにあらざる説教であるが、見方によってはスパーストウがピューリタン革命勝利への執念を国王軍に見せつけている説教でもあったと言えよう。革命が議会軍の勝利に終わり、チャールズ一世が捕らえられると今度は王の処刑が問題となってくる。チャールズ一世以前にも王の腹心ロード処刑に際し、断食説教が積極的に賛成し、チャールズ一世処刑にも断食説教は強くその処刑を訴えた。その意味で断食説教は極めて政治色の強い説教であった。スパーストウが説教を行ったときはまだ説教はそれほど政治的過激性が強い説教ではなかった。説教家はまだ政治的に発言することに遠慮していた感が強い。スパーストウの説教もそのような説教であった。しかし、火薬陰謀事件日において事件だけについてだけ説教をすることはできなかった。説教を精読すると随所に議会軍と国王軍との戦いへの言及が見られ、議会軍を叱咤激励する場が少なくない。その意味ではスパーストウは真のピューリタンであり、ピューリタンとして革命の勝利を疑わなかった一人でもあったのである。

## 注

- (1) 4編の説教とは William Spurstowe, *Englands Eminent Judgements, Caus'd by the Abuse of Gods Eminent Mercies* (London, 1644), John Strickland, *Immanuel, or The Church Triumphant in God with Us* (London, 1644), Anthony Burges, *Romes Cruelty and*

- Apostacie* (London, 1645), Charles Herle, *David's Reserve and Rescue* (London, 1645) である。これら4編の説教は Robin Jeffs ed., *Fast Sermons to Parliament* (London: Cornmarket Press, 1971), Volume 14に収録されている。
- (2) この一節は William Spurstowe, *Englands Eminent Judgements, Caus'd by the Abuse of Gods Eminent Mercies* (London, 1644), p. 1に引用されている。
  - (3) このタイトルの綴りは元々の綴りで、*Fast Sermons to Parliament* では上記の綴りとなっている。
  - (4) Spurstowe, p. 15.
  - (5) “fast sermon” については Christopher Hill, *The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution* (London: Penguin Books, 1993), pp. 79-108や Hugh Ross Trevor-Roper, *Religion, the Reformation, and Social Change* (London: Macmillan, 1967), Chapter 6で詳しく論じられている。また、Christopher Hill, *The Collected Essays of Christopher Hill Vol. 2* (Brighton: Harvester Press, 1986) の “Religion and Politics in 17th Century England” でも “fast sermon” についての言及がある。この他に John F. Wilson, *Pulpit in Parliament: Puritanism during the English Civil Wars 1640-1648* (N. J.: Princeton University Press, 1969), Chapter III でも “fast sermon” が論じられており、それぞれ教えられるところが多い。
  - (6) Spurstowe, The Epistle Dedicatory.
  - (7) Ibid., p. 2.
  - (8) Ibid., p. 11.
  - (9) Ibid., p. 11.
  - (10) Ibid., p. 11.
  - (11) Ibid., p. 12.
  - (12) Ibid., p. 12.
  - (13) Ibid., pp. 13-14.
  - (14) Ibid., p. 10.
  - (15) Ibid., p. 10.
  - (16) King James I, *Triplici Nodo, Triplex Cuneus, or an Apology for the Oath of Allegiance in the Political Works of James I* ed. C. H. McIlwain (New York: Russell & Russell, 1965), p. 281.
  - (17) Ibid., p. 11.
  - (18) Ibid., p. 11.
  - (19) Ibid., p. 11.
  - (20) Ibid., p. 11.
  - (21) Ibid., pp. 26-27.
  - (22) Ibid., p. 27.
  - (23) Ibid., p. 11.
  - (24) Strickland, p. 15と p. 16で “the Powder Treason” という表現が使用されている。“this day” (11月5日) は4回言及されている。
  - (25) Spurstowe, p. 23.
  - (26) 1644年の議会軍と国王軍との戦いについては以下を参照した。Martyn Bennett, *The*

*Civil Wars in Britain & Ireland 1638-1651* (Oxford: Blackwell, 1997), P. R. Newman, *Atlas of the English Civil War* (London and New York: Routledge, 1998), Martyn Bennett, *Historical Dictionary of the British and Irish Civil Wars 1637-1660* (Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers, 2000), Walter Money, *The First and Second Battles of Newbury and the Siege of Donnington Castle During the English Civil War* (Nottingham: Oakpast Ltd., 2009), 松村赳・富田虎男編『英米史辞典』(東京: 研究社、2000年)。

(27) Spurstowe, p. 25.

(28) op. cit., The Epistle Dedicatory.

(29) Ibid., p. 25.

(30) Ibid., p. 25.

(31) Ibid., p. 26.

(32) Ibid., p. 8.

(33) Ibid., p. 6.

(34) Ibid., p. 18.

(35) Ibid., p. 18.

(36) Ibid., p. 24.

(37) Ibid., p. 24.

(38) Ibid., p. 25.

(39) Ibid., p. 27.

(40) Ibid., p. 29.

(41) Ibid., p. 29.

(42) Ibid., p. 28.



## 2 ウィリアム・ストロングの火薬陰謀事件説教

### 2-1 はじめに

スパーストウの説教から2年後、ウィリアム・ストロングは1646年11月5日にウェストミンスター寺院に隣接している聖マーガレット教会で庶民院議員に向けて火薬陰謀事件説教を行った。これだけなら格別我々の注意をひきつけはしない。ただストロングが独立派ピューリタンであるということを見るとその説教を単なる火薬陰謀事件記念説教と見なすことはできなくなってくる。1605年11月5日の火薬陰謀事件以来毎年英国国教会説教家もっぱら事件日に火薬陰謀事件説教を行っていた。しかし、ピューリタンが社会的に勢力を得て、王党派が劣勢に追いやられるにつれてピューリタン説教家が台頭し、彼らの説教が主流となってくる。ストロングが火薬陰謀事件説教を行った1646年はピューリタン革命が起こってから4年が経過していた。1646年に入ると1月のデヴォンでの勝利、2月のトリントンの戦い、4月のチャールズ一世のオックスフォード逃亡、5月のスコットランド軍へのチャールズ一世の投降、7月の議会軍によるウスター占領、8月の王党派最後の拠点コーンウォールの守備隊降伏が続き、議会派は徐々に革命の主導権を握っていく。内乱は明らかに議会派に有利に進行していた。そのような国内情勢の中でストロングは1646年11月5日の火薬陰謀事件記念日に説教を行う。火薬陰謀事件説教は元々事件日の11月5日に事件の全容を国民に周知させることを目的とした説教である。事件後の英国国教会説教家による記念説教では何よりも事件を未然に防いだジェームズ一世に賞賛を浴びせ神の「慈悲」を強調する説教が主である。ところがストロングの説教を読んでも火薬陰謀事件についての記述は見られるがジェームズ一世の奇跡的な事件からの救出への喜びは書かれず、ジェームズ一世の名も一度も出てこない。ストロングの火薬陰謀事件はそれまでの英国国教会説教家による説教とはその内容を全く異にしている。一体ストロングの火薬陰謀事件説教の真意は何か。本章では以下の点を中心にして論を進めていきたい。第一点はジェームズ一世による1605年11月9日の国会演説である。以後の英国国教会説教家の火薬陰謀事件説教はジェームズ一世のこの国会演説を踏襲しているからである。第二点はストロングの火薬陰謀事件観である。第三点は説教で扱う聖書の一節と火薬陰謀事件との関係である。ストロングは「エズラ記」を説教の冒頭に掲げるが、その聖書の一節と事件の関係はどのように説明されるのかである。第四点としてストロングの火薬陰謀事件の主題は火薬陰謀事件であったのかということである。結論としてストロングの火薬陰謀事件説教は、説教時の英国社会と密接に関係しており、火薬陰謀事件そのものよりは英国社会の現状改革を訴えた説教であることを論じていきたい。

### 2-2 ジェームズ一世の1605年11月9日の国会演説

最初に取り上げねばならないのはジェームズ一世の国会演説である。その理由は、ストロングの説教のタイトルが「慈悲の祝賀と賞賛」とあるように彼の説教では事件における「慈悲」が特に重視されているからである。スパーストウが「慈悲」を強調していたようにストロングもまた説教で「慈悲」を強調してやまない。英国国教会説教では火薬陰謀事

件は神の慈悲によってジェームズ一世は救われたと言うが、それはジェームズ一世の国会演説に呼応したものである。

ジェームズ一世の国会演説は火薬陰謀事件から4日後の演説であるだけに事件からの王の無傷の救出への思いが強い。ジェームズ一世は演説のなかで特に「神の慈悲」のおかげで事件は未遂に終わったと神への感謝を強調する。「神の慈悲による危機からの救出」はジェームズ一世国会演説の基調である。ジェームズ一世は演説の中で「詩編」145章9節の“*Misericordia Dei supra omnia opera eius*”に触れるが、それはダビデが主の慈悲を強調している一節である。ジェームズ一世の演説では神による王の奇跡的救出が強調される。ジェームズ一世は演説の目的について以下のように明確に述べる。

So now my Subject is to speake of a farre greater Thanksgiuing then before I gaue to you, being to a farre greater person, which is to God, for the great and miraculous Deliuery he hath at this time granted to me, and to you all, and consequently to the whole body of this Estate<sup>(1)</sup>.

演説の目的は神に対して以前よりも「はるかに大きな感謝」を語ることにある。なぜかと言えば神はジェームズ一世を始めとして国会にいたすべての人に「すばらしく奇跡的な救出」を与えてくれたからである。「奇跡的救出」と「神への感謝」は演説のキーワードである。「神への感謝」は言うまでもなく神の慈悲への感謝である。以後火薬陰謀事件記念説教を行う英国国教会説教家はこの二つを説教で取り上げ、ジェームズ一世と神を賞賛することが彼らの暗黙の義務となる。更に事件の残虐性も説教の重要な点である。事件の残虐性は以後の説教家が扱ったテーマでもあったが、ジェームズ一世は火薬陰謀事件が残虐極まりない事件であったかを強調する。

This [the Gunpowder Plot] was not a crying sinne of blood, as the former [the Gowrie Plot], but it may well bee called a roaring, nay a thundring sinne of fire and brimstone, from the which God hath so miraculously deliuered vs all<sup>(2)</sup>.

火薬陰謀事件ははなはだしい血をもたらず罪ではなく、「火と硫黄の轟く、否、雷鳴のような罪」でそこから神が奇跡的に王を救出してくれたのである。事件の残虐性についてジェームズ一世は更に次のように言う。

First, in the crueltie of the Plot it selfe, wherein cannot be enough admired the horrible and fearefull crueltie of their device, which was not onely for the destruction of my Person, nor of my Wife and posteritie onely, but of the whole body of the State in generall; wherein should neither haue bene spared or distinction made of yong nor of old, of great nor of small, of man nor of woman: The whole Nobilitie, the whole reuerend Clergie, Bishops, and most part of the good Preachers, the most part of the Knights and Gentry<sup>(3)</sup>;

この一節は火薬陰謀事件の“the horrible and fearefull crueltie of their device”を指摘するのみならず、国会の参列者をも挙げている。国会議事堂爆破計画は王、王妃、子息、国家の要人、老若男女、貴族、聖職者、主教、説教家、ナイト及びジェントリー、これらすべての人を殺害することになる事件であった。ジェームズ一世は殺害方法には人間、動物、それに「水」と「火」があるが、そのなかでも「火」による殺害は最も凶暴かつ残酷であると言ひ、火薬陰謀事件の残虐性を非難する。

次にジェームズ一世が論ずるのは事件の動機である。なぜジェズイットは王殺害を狙ひ、国会議事堂爆破を計画したのか。ジェームズ一世からすれば事件の動機は、「ささいな理由と言えない理由」である<sup>(4)</sup>。事件の首謀者が王のために破産したり不満を抱いている者であればこの事件は復讐である。しかし、ジェームズ一世は彼らをそのような事態に至らせたことはない。事件は、「単に宗教のみ<sup>(5)</sup>」が引き起こした事件であった。事件の首謀者ガイ・フォークス (Guy Fawkes) によれば火薬陰謀事件はカトリック教徒に対する“cruell Lawes”のためであった。英国内におけるカトリック教徒への弾圧・抑圧が彼らをして王殺害という暴挙に走らせたのである。しかし、ジェームズ一世からすればすべてのカトリック教徒を弾圧したわけではない。彼は国内の平和・秩序維持のために一部反体制的な過激なカトリック教徒・ジェズイットを取り締まっただけで、王に対して忠実なカトリック教徒まで弾圧したことはなかった。ジェームズ一世は従順なカトリック教徒に対しては寛容な態度をもって接していたのである。ジェームズ一世がカトリック教徒を厳しく取り締まったとしたらそれは彼らが国内の秩序を乱すために他ならなかった。国内の秩序維持のためにジェームズ一世がとった法的手段の一つが「忠誠の誓い」であったことは言うまでもない。ジェームズ一世王朝維持のためには国状安定は不可欠である。ところが一部過激なジェズイットが国内を混乱に陥れようとしている。その第一歩が火薬陰謀事件であった。

第三にジェームズ一世は火薬陰謀事件発覚の経緯について述べる。ジェームズ一世は事件についての謎めいた書簡を受けとり、即座にその真意を読み取ったのである<sup>(6)</sup>。これは事件の首謀者の一人のフランシス・トレシャム (Francis Tresham) が、親戚のモントイーグル (Monteagle) 卿に国会議事堂爆破陰謀の全容を知らせるメモを送り、それをモントイーグルはソールズベリー (Salisbury) 伯爵に見せ、伯爵はその意味を読み取ったが、メモの解読をジェームズ一世に任せるために王にそのメモを見せたのである。そのメモを即座に理解し、事件の真相を突き止めたのはジェームズ一世であった。火薬陰謀事件を未然に防ぎ、国を救ったのはジェームズ一世自身であったのである。これ以後の英国国教会説教家たちはこぞってジェームズ一世自らによる手紙の解読に言及し、神憑り的なジェームズ一世を激賞し、王の神格化を吹聴する。このようにジェームズ一世は火薬陰謀事件からの奇跡的救出、神の慈悲、事件の残虐性、動機、及び事件発覚者としての自分自身について述べる。特にジェームズ一世は神の慈悲を訴える。信心深い王に対して神は事件直前に慈悲を示し、王の生命を危機から救ってくれたことを王は強調する。ジェームズ一世は神の慈悲について“this his mercifull Delivery<sup>(7)</sup>”、“a divine worke of his Mercy<sup>(8)</sup>”、“Thanksgiuing to God for his great Mercy<sup>(9)</sup>”といった表現を演説の中で幾度も使用し、事件発覚の背後には神の慈悲があったことを繰り返す。そして“Misericordia Dei supra omnia opera eius”即ち、「神の慈悲は神のすべての御業を超える」と神の慈悲を讃える

のである。ジェームズ一世が国会演説で何よりも強調したかったのは火薬陰謀事件からの救出は神の慈悲によるものであり、それに対する神への感謝であった。

次にジェームズ一世は暗に臣民が火薬陰謀事件を非難する熱意に燃え、王に対する「柔順な愛情」を示すことを期待する<sup>(10)</sup>。王への「柔順な愛情」とは火薬陰謀事件を非難し、王を擁護することである。事件関係者は「宗教における彼らの誤りへの唯一盲目的な迷信」により事件は引き起こされたと言い<sup>(11)</sup>、カトリック教徒に対して寛容な態度を示している。しかし、事件関係者には厳しい態度を取ることをジェームズ一世は忘れはしない。ジェームズ一世にとって王は国家である。王なくして国家なしという絶対王政に頑なに執着している。ジェームズ一世の「柔順な愛情」表明要請は過激なカトリック教徒の蛮行を国民に知らしめ、事件が人々の記憶から消え去ることを極度に恐れたジェームズ一世がとった策であった。ジェームズ一世の国会演説はまた過激なジェズイトへのジェームズ一世の処置が誤っていないことを示している。ジェームズ一世は演説の中で国会の目的として「神の栄光と王と国民の確立及び富の促進<sup>(12)</sup>」を挙げ、ジェームズ一世は国益に資することに神から命じられていると述べ、自らのカトリック教徒への政策に誤りはないことを強調する。そして聴衆に国内の潜在的な悪事の発見及び反逆者の横柄な行為鎮圧に励行するよう訴える。そして、王の繁栄と隆盛が国家の繁栄と一致するとも言う。

ジェームズ一世の国会演説で王は「詩編」の“*Misericordia Dei supra omnia opera eius*”を引用していた。ダビデはその生涯において数々の危機に直面し、そのたびに神に救出されている。つまりダビデはジェームズ一世と同じ危機に遭遇している。ジェームズ一世は自らをダビデに重ね合わせているのである。確かに当時の説教家にはジェームズ一世をダビデ再来として賞賛している説教家もいる。タイポロジー的な聖書解釈によりジェームズ一世を聖書の様々な人物に適応するのである。だからジェームズ一世はダビデやソロモンやキリストにすら適応され、神格化される。説教家は火薬陰謀事件説教を行うに際し、聖書の一節を「詩編」からもってくる。なぜかと言えばタイポロジカルにジェームズ一世をダビデと解釈したいからである。ジェームズ一世後の説教家たちは聖書の一節をジェームズ一世に適応するが、ジェームズ一世はさすがに「詩編」を自らに適応はしない。ジェームズ一世が聖書のなかでも特に「詩編」を愛読し、英訳もしていたことはよく知られている。自らの生命の危機に際し、「詩編」を引用したのはジェームズ一世がダビデと同じ体験をした人間であることを一般国民に示し、それにより自らの神格化の強化を計る狙いがジェームズ一世にはあったと考えられる。いずれにせよジェームズ一世とダビデの関係をタイポロジカルに解釈するのは王以降の説教家たちであり、ジェームズ一世の国会演説に呼応して事件を批判し、王を神格化した最初の説教家はウィリアム・バーロー(William Barlow)であった<sup>(13)</sup>。

ジェームズ一世の国会演説後、英国国教会説教家による火薬陰謀事件記念説教には共通した手順があった。それは(1)事件に類似した一節を聖書から選び、それを事件に適応することによって聖書から事件を批判する。(2)事件の残忍性(3)ジェームズ一世による事件発覚(4)ジェームズ一世の奇跡的救出(5)ジェームズ一世を救出してくれた神の慈悲への感謝である。英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教はだいたいこのような手順を踏んでいた。それではピューリタンのストロングの火薬陰謀事件説教はどうであろうか。

### 2-3 ストロングと火薬陰謀事件

ピューリタンのストロングは、1646年11月5日の火薬陰謀事件記念日にウェストミンスター寺院と同じ敷地内にある聖マーガレット教会 (St. Margatret's Church) で説教を行った。その説教のタイトルは「慈悲の祝賀と賛美。1646年11月5日、ウェストミンスター寺院、聖マーガレット教会で名誉ある庶民院への説教で述べられる。すぐれた古くからの慈悲、カトリック教会と非道なる火薬陰謀事件の陰謀からの国民と全王国の救出のための国民の感謝の日」(The Commemoration and Exaltation of MERCY. Delivered in A SERMON Preached to the Honourable, the House of COMMONS, at Margarets Westminster, *Novemb.* 5. 1646. Being the day of their publike thanksgiving, for that eminent and Ancient Mercy, the Deliverance of them, and the whole Kingdome in them, from the Popish and Hellish Conspiracy of the Powder Treason<sup>(14)</sup>) である。ストロングが説教に選んだ聖書の一節はスパーストウと同じ「エズラ記」9章13-14節で、ストロングは説教の前半で13節を、後半で14節を扱う。ストロングの説教方法は、最初に“Doctrine” (教理) を、次に“Use” (適応) を論じるという方法である。前半、後半とも同じ構成になっている。ストロングの説教で気づくのはそれまでの英国国教会説教家による説教との違いである。厳密に言えばストロングの説教は上記の英国国教会説教家の手順を踏襲していない。ピューリタンであるストロングの説教が英国国教会説教家と異なるのは当然で、彼が英国国教会説教家の説教手順をそのまま受け継ぐ必要はない。しかし、彼の説教は火薬陰謀事件日における記念説教であるので、ピューリタンと言えども火薬陰謀事件を取り上げざるをえない。確かにストロングは説教で火薬陰謀事件を取り上げており、そこからストロングの火薬陰謀事件への態度を見ることができる。一つは説教の序文である庶民院議員への献呈書簡での過去の英国史で示された神の慈悲の例として1588年のスペイン無敵艦隊による英国襲来と1605年の火薬陰謀事件を挙げ<sup>(15)</sup>、それ以来類似した多くの危機から英国は救われたと言う。ストロングが火薬陰謀事件に言及しているのは次の一節である。

Perusing the Annals of *England*, we finde *Anno* 1605. A glorious deliverance recorded, which God vouchsafed to the Representative body of this Nation, and in them to the whole Kingdome, from a *Popish hellish Conspiracy*, of long deliberation and sudden execution. The wood was laid in order, and the child as it were bound upon the wood; the knife prepared, and the hand lifted up; and then came the voice from heaven, *stay thine hand*<sup>(16)</sup>.

1605年に周到な準備から突然実行された「カトリック教徒の忌まわしい陰謀」から神による国会議員の救出が記録されているとストロングは火薬陰謀事件について書いているが、“the Gunpowder plot” という表現はない。後半の「まきがきちんと置かれ云々」は史実とは異なる。「天からの声、あなたの手をとどめるがよい」は事件が実行直前に発覚したことに言及しているが、ストロングは事件の発覚は神によるとみなしている (英国国教会説教家はジェームズ一世によって事件は未然に防がれたとした)。また火薬陰謀事件が成功したら英国は多くの命を失い、「われらの族長」をも失ったであろうと言うが、事件の

もたらす英国への影響についての見方は正しい。

Had this plot [of the Gunpowder Plot] taken, it would have cost many mens lives, and these the cheife of our Tribes; and how much bloud might have followed, who knows?<sup>(17)</sup>

「われらの族長」とはもちろんジェームズ一世をさす。スパーストウは“the head”とジェームズ一世を評していたが、ストロングはスパーストウ同様王の名前を出すことを控えている。「いかに多くの血が流れたかもれなかった」では事件の残虐性に言及している。次の一節では火薬陰謀事件の背景にはローマ・カトリック教会があったことを述べている。

The thing was plotted beyond the Seas, with the influence doubtlesse of all the policy of Rome: Instruments chosen and brought over of purpose, men skilfull to destroy: It was communicated but to a few, and to these under the oath of secrecy, receiving the Sacrament thereupon<sup>(18)</sup>.

ここではストロングは、事件の実行犯はカトリック教徒であること、事件がカトリック教の影響を受け、ローマで計画されたこと、爆破用の火薬がローマから持ち運ばれたこと（これは信ぴょう性を欠く）や熟練した実行犯選出、少数の人へ計画を伝えたこと、すべてがカトリック教会の主導の下で行われたことを指摘する。ストロングは事件の準備と事件後の実行犯の行動についても記し<sup>(19)</sup>、事件の実行犯は自らの作ったわなにかけられ、穴倉に落ちたとも言っているが<sup>(20)</sup>、これらの記述も史実に合っている。ストロングは前半の‘Use’（適応）で火薬陰謀事件を総括して以下の点を挙げている<sup>(21)</sup>。

- (1) The more bitter the enemies, and the more deadly the danger, the greater the deliverance, when the snares of death doe compasse us about and the paines of hell take hold of us.
- (2) The deeper a plot is laid, and then to be defeated, the greater the mercy: They have taken crafty Counsell against thy people and they consulted against thy hidden ones.
- (3) The more confident an enemy is of successe, the greater is the mercy in such a Deliverance, when they are folded together as thornes in a confederacy, and drunken with confidence as drunkards, then they shall be consumed as stubble fully dry.
- (4) The more immediatly the hand of God is seene in any deliverance, the greater it is; when the Lord makes his bow naked and his arme bare and doth ride for his peoples safety upon his charets of salvation.
- (5) That it should not end only in our Deliverance, but in the enemies destruction.

(1)から(5)までは敵の敵意が激しければ激しいほど、危険が致命的であればあるほどそれだ

け神による救出は偉大であること、陰謀が秘密裏に企てられ、それが失敗に帰せば慈悲はそれだけ偉大となる、敵が陰謀の成功に自信を持てば持つほど救出において慈悲は偉大である、神が救出をすぐに行えば行うほど救出は偉大なものとなる、神は救出で終わるのでなく敵の破滅で終わることを述べている。以上は一言で言えば火薬陰謀事件における神の慈悲の偉大さである。火薬陰謀事件ではすべてを解決してくれたのは個人ではなく神である。ストロングの火薬陰謀事件についての記述を見ると、ストロングは事件についてほぼ正しく理解していることがわかる。上で挙げた英国国教会説教家の説教手順は(1)事件に類似した一節を聖書から選び、その事件への適応によって聖書から事件を批判する。(2)事件の残忍性糾弾(3)事件発覚者としてのジェームズ一世賞賛(4)ジェームズ一世の奇跡的救出賞賛(5)ジェームズ一世救出に際し神が示してくれた慈悲への感謝であった。このなかで(1)に関してストロングは「エズラ記」9章13-14節を説教の冒頭にあげているがインパクトは薄い。なぜかと言えば聖書の人物が生命の危機に直面し、そこから神によって救出されるのが英国国教会説教家のお決まりであったからである。「エズラ記」9章の前半13節ではイスラエル人の実際の罪よりも軽い罰を神は下し、彼らを救出してくれたことが述べられているが個人ではなくイスラエル人全体への神の救出が強調されている。英国国教会説教では説教の主題はジェームズ一世という個人であり、王の神格化を国教会説教家が行った。「エズラ記」9章の後半14節では罪への逆戻りが扱われており、火薬陰謀事件とは直接関係はない。(2)の事件の残虐性についてもストロングは特に強調はしていない。(3)の事件発覚者としてのジェームズ一世賞賛についてストロングはジェームズ一世の名前を説教で用いることをしていない。これは上で論じたスパーストウと同様の態度である。王政廃止を求めるピューリタンからすればジェームズ一世を賛美することはありえない。(4)は(3)と関連があるが、ジェームズ一世の奇跡的救出を“Stay thine hands”と天からの声によって事件は未然に終わったことを述べるにとどまる。ストロングの説教が英国国教会説教家と一致している点は最後の(5)である。火薬陰謀事件における神の慈悲はジェームズ一世がとりわけ重視したものでありその後の英国国教会説教家もこぞって事件における神の慈悲を取り上げ、ジェームズ一世に追従的態度を示した。ストロングの説教のタイトルが「慈悲の祝賀と賛美」である。火薬陰謀事件において神によって示された慈悲を祝い、賛美することが彼の説教の主題である。とすればストロングの説教ではジェームズ一世ではなく慈悲をもたらした神こそが大々的に論じられべき説教となってくる。あくまでも説教の主役は神であり、ジェームズ一世ではない。ストロングの説教での「慈悲」強調については既に触れ、それがジェームズ一世の「慈悲」観と同一であることを指摘した。ジェームズ一世への賞賛が顕著な英国国教会説教家に対し、ストロングはジェームズ一世個人への賞賛を行わない。反王権派、共和制支持派の独立派のストロングからジェームズ一世賞賛の声が聞かれないのは当然である。ストロングは11月5日に集まったのは慣習に従って事件記念日追悼を行うためではなく、神が称えられ、我々が神への賞賛を栄光あるものにするためであると言う<sup>(22)</sup>。また口先だけの神への祈りや賛美によって人の心は大きくなり、心が大きくされるために集まっているとも言うが<sup>(23)</sup>、ピューリタンの神への祈りや賛美は形骸化したカトリック教徒とは異なることを暗に示している。自らの宗教心を聖者のように「輝かしい神の気遣いへの熱心な愛」を持てば人が天国に行くとき彼らの能力は拡大される<sup>(24)</sup>。また神の栄光の賛美は人間の力だけでは不可能で、それができるの

は悪によって閉ざされている口を神が開いてくれるからである。口を閉ざし、我々の罪を大罪と考えなければ我々は形式的な告白によって罪を片付ける。神から受けた慈悲を些細なものと考えると言葉だけの感謝で十分となる。最後に事件日に集まっている理由は神の前でへりくだるためである。ストロングにとって火薬陰謀事件日に集まっている理由はあくまでも火薬陰謀事件記念説教日の主役は神であり、決してジェームズ一世ではないことを告げるためである。ストロングは次のように言う。

*But there is a God that reveals secrets, before whom Hell and Destruction are open; much more the hearts of the sonnes of men; and he discovered it<sup>(25)</sup>.*

謎めいた手紙を解読したのはジェームズ一世ではなく神である。神の前には地獄も破壊も丸見えで人間の心も隠し事はできない。だから神が火薬陰謀事件を発見したとストロングは言う。事件を未然に防いだのはジェームズ一世ではない。さらにストロングは次のように言う。

*Hee [God] will certainly outwit them [plotters] all at last, and take the wise in their owne craftinesse<sup>(26)</sup>.*

神は事件陰謀者よりも賢い。後半は「ヨブ記」5章13節を踏まえての言葉であるが、神は賢い者（ここでは悪賢い者である）を「彼ら自身の悪だくみによって捕らえ、曲がった者の計りごとをくつがえされる」。事件はまさに実行者自らによって明らかになり、彼らの陰謀は無に帰す。神の知恵の威力に比べいかに人間の知恵ははかないか、いかに矮小かをストロングは述べ、火薬陰謀事件はすべて神によって解決されたと言う。また、次の引用文では神がいかに陰謀者たちより賢いかを述べている。

*He [God] did laugh them [the conspirators] to scorn, did blow upon their counsel, made the device to be of none effect, and wherein they concluded with themselves proudly hee was above them<sup>(27)</sup>.*

神による陰謀者たちへのあざ笑い、彼らの協議の軽視、なんの効果もない彼らの策略、神の知力が陰謀者たち勝っていると最後に言い、陰謀者たちは神に完敗したことを認めた。事件がすべて未然に終わったのはジェームズ一世のお陰ではなく神による。いかに巧妙に事件を計画しても神によってすべては解決される。英国国教会説教家のように個人崇拜をストロングは避けている。これは英国国教会説教家とピューリタン説教家の大きな違いである。彼の論点は他にある。火薬陰謀事件日記念説教において説教家が事件を取り上げ、事件を詳細に論じ、ジェームズ一世と英国を擁護するのは当然のことであったが、ピューリタン説教家はそうではない。とすればストロングの説教の真意は他にあることは十分予想される。彼の「真意」はどこにあるのか。この問題を解く鍵はストロングが説教の冒頭に挙げた聖書の一節にある。この一節を吟味することによりストロングの説教の主題が明らかになってくる。



## 2-4 「エズラ記」 9章13-14節と火薬陰謀事件

ストロングが説教のテーマに挙げた聖書からの一節はスパーストウ同様旧約聖書「エズラ記」9章13-14節である。

After all that is come upon us for our evill deeds and for our great trespasse, seeing that thou our God hast punished us lesse then our iniquities deserve, and hast given us such a deliverance as this:

Should we againe break thy Commandements and joyne in affinity with the people of these abominations? Wouldst thou not be angry with us till thou hadst consumed us, so that there should be no remnant nor escaping?

(われわれの悪い行いにより、大いなるとがによって、これらすべてのことが、すでにわれわれに臨みましたが、われわれの神なるあなたは、われわれの不義よりも軽い罰をくだして、このように残りの者を与えてくださったのをみながら／われわれは再びあなたの命令を破ってこれらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか。あなたはわれわれを怒って、ついに滅ぼし尽くし、残る者も、のがれる者もないようにされるのではないのでしょうか。)

「エズラ記」はバビロン幽囚のイスラエル人がペルシア王クロスによってエルサレム帰還を許され、帰還後サマリア人の反対があったにもかかわらずエルサレムに神殿を再興し、エズラがその後エルサレムに帰ってきたことが記されている。ストロングが挙げた一節はイスラエル人の雑婚の報告である。幽囚から帰国したイスラエル人がイスラエル人以外の女性と結婚し、律法を破ったのである。イスラエル人や祭司やレビ人は、カナン人等異民族との関係を絶つことなく、逆にこれらの国々の娘と結婚をし、聖なる種族がこれらの国々の民と混じり合い、その神聖さを失った。問題はイスラエル人の異教徒との結婚ではない。結婚により異教徒の偶像礼拝がイスラエル人に入り込んで来たことが最大の問題点であった。神が忌みきらい偶像礼拝や不品行が異教徒との婚姻によってイスラエルの中に持ち込まれたこと、これがエズラを最も悩ませたことであった。それはちょうど荒野の旅を続けているイスラエル人にモアブ人の娘たちが入り込み、イスラエルの男たちが彼女たちと不品行を犯し、彼女たちの神々を拝み始めた状況に類似している。先住の民の忌まわしい行ないをユダの王アハズやマナセなどが取り入れ、それゆえに彼らはその土地から引き抜かれた。それにも関わらず神が完全に罰することをしなかったので残された者がいる。9章14節は「私たちは再び、あなたの命令を破って、忌みきらい行ないをするこれらの民と互いに縁を結んでよいのでしょうか。あなたは私たちを怒り、ついには私たちを絶ち滅ぼし、生き残った者も、のがれた者もないようにされるのではないのでしょうか」と書かれている。これまで以上にイスラエル人は神が彼らを壊滅させるにふさわしい状態になってしまった。エズラには正しい神と罪に汚れた姿の対比がある。そこから真の悔い改めと罪への悲しみが生じてくる。「エズラ記」9章13-14節は単なるイスラエル人の異国民との雑婚だけが主要な点ではない。ストロングがこの一節を説教の主題にしたのも雑婚を論じるためではなかった。ストロングは、イスラエル人は幾度となく罪を犯しながらもその罪を悔

い、結果として神から生き残りを許されていたことを訴えたかったのである。神による生き残りが“such a deliverance as this”で、この「救出」の祝賀が13節の主題である。ストロングが説教で強調したかったのは英国民が過去における1588年の無敵艦隊と1605年の火薬陰謀事件からの神の慈悲による救出を忘れずに今一度神の慈悲に対して感謝をすべきだということである。「エズラ記」には以前の罪へ戻ることへの「重大な心底からの嫌悪」が含まれている<sup>(28)</sup>。本論に入る前の書簡献呈のなかでそれは三つの議論によって主張されている<sup>(29)</sup>。

1. 神の正義と神の以前の裁きの記憶。バビロンにいるときはシオンを思い出し、シオンに戻るとバビロンを思い出す。
2. 神の慈悲と処罰と救出。主は罪に応じてイスラエル人を扱わなかった。主は怒りを奮い立たせることもでき、幽囚の地バビロンでイスラエル人の墓を作れたし、イスラエル人も祖国を見ることはなかったかもしれない。しかし、主はイスラエル人が卑しかったとき彼らを覚えてくれた。主の慈悲は永遠に絶えることがないからだ。主は我々が値する以下に罰し、我々の期待以上に我々を救出してくれた。
3. 我々は主の裁きにおいて一掃されてしまった。我々はききん、つるぎ、疫病に渡された。は無益な排せつ物になぞらえた。エルサレムの住民は1/3が焼かれ、1/3がつるぎで殺され、1/3が風に散るように捕囚として運び去られる。それでも少数は預言者の裾にくるまれた。1605年11月5日に救出された人々がいたようにエルサレムで生命の書に名前を書かれた人もいた。しかし、もし神の命令を破り、また古い罪に戻れば完全な破壊以外に何も期待できない。主は残る者も逃げる者も残さない。

ストロングは火薬陰謀事件からの救出の記念と罪への逆戻り嫌悪から以下の二つの「考察」(observations)を提示する<sup>(30)</sup>。

1. 感謝する心は神を高く理解し、すべての慈悲を偉大と見なす。
2. 偉大な救出を受けた後に以前の罪への逆戻りは神を非常に怒らすことである。

ここまでくるとストロングが説教の冒頭に「エズラ記」9章13-14節を挙げた真意がわかってくる。説教のテーマは「慈悲」と「以前の罪への逆戻り<sup>(31)</sup>」であり、「慈悲」への忘恩と慈悲の下での「おごり」である<sup>(32)</sup>。1588年や1605年に存亡危機に遭遇した英国が危機を脱したのは神の慈悲のおかげである。ところがその慈悲への思いが国民の間で徐々に希薄化してきている。ストロングはこれを最も懸念した。慈悲の希薄化は神への軽視を意味する。

火薬陰謀事件説教ではすでに指摘したように説教家は聖書の一節を事件へ適応する。英国国教会説教家は聖書から窮地に陥った人物が神から救出される事件を取り上げる。火薬陰謀事件でのジェームズ一世の窮地を思い起こさせる事件である。そして、聖書の一節から火薬陰謀事件を批判し、併せてジェームズ一世の奇跡的救出を賛美し、神の慈悲への感謝で説教は終わる。ストロングの説教のテーマのうち神の「慈悲」については英国国教会説教家と同じである。火薬陰謀事件が失敗に終わったのは神の慈悲によるというのは

ジェームズ一世も国会演説で強調した点で、それについては既に論じた。1588年のスペイン襲来からの脱出も神の慈悲のおかげであった。神の慈悲による国の危機脱出はまた「神の国」としての英国観を生み出す大きな要因にもなったが、ストロングが問題にするのは英国人が神の慈悲を忘れかけていることへの警鐘である。神への忘恩に対するストロングの危惧の念は非常に大きい。ストロングは神から受けた慈悲に対して感謝の念がないことについて次のように言う。

Wee are very apt to bee importunate for mercies, when we want them; and to despise and under-value them when we doe enjoy them... God hath honoured, loaden, yea crowned you with mercies; his faithfulness and truth hath been your shield and buckler<sup>(33)</sup>;

我々は慈悲を欠く時に慈悲を求め、慈悲を享受すると慈悲を蔑み、過小評価する。神は英国民に慈悲で報いてきた。神の「誠実さ」と「真理」は英国人の「盾」である。1588年と1605年以降も神は多くの「無敵艦隊」と「火薬陰謀事件」から英国を救出してくれたが、それもすべて神の慈悲のおかげである、とストロングはことのほか「慈悲」を強調する<sup>(34)</sup>。ストロングは1588年と1605年に英国が受けた神の慈悲を古くさせるなど警告する。

Let these mercies never wax old to you; it is an evil that we are all prone to, that as time will weare out the sense of sinne, so it will the esteeme of mercy; and hee that shall keep either the one, or the other always fresh before him, had need be anointed daily *with fresh Oyle*...mercies are eternall obligations<sup>(35)</sup>;

時の経過とともに神の慈悲を忘れるのは人が陥りやすい悪であり、時が罪の意識を弱め、慈悲への尊敬をも弱める。罪の意識と慈悲への尊敬をたえず持ち続ける人は「日々新鮮な油を塗られる必要がある」と言う。慈悲は永遠の神への恩義であり、我々は決して神の慈悲を忘れるべきではない。慈悲が神への恩義であるとすれば我々は恩義に対して何をなすべきか。それは絶対的存在としての神への帰依である。その帰依があってこそ人は世界を揺るぎない信念を持って生き続けることができる。自らの罪を深く悔い、神の慈悲へ敬愛を抱き続けることによって世界は確固たる平和を示してくれる。それゆえ慈悲を忘れることのほかに慈悲を受けた結果としての「おごり<sup>(36)</sup>」についてストロングはまた厳しい態度を示す。旧約聖書からの例として飼い主を足で蹴った獣のようになってしまったエシュルン（イスラエル）（申命記32：15）と神の助けを得て強くなったがその心が高ぶり、最終的には自分を滅ぼしたウジヤ（ホセア：13：6）を挙げる<sup>(37)</sup>。荒野の遊牧時代には神と民との間には真の交わりがあったが、カナンに入ってから彼らは飽食して高ぶる者となり、神を忘れた。そのようなイスラエルに対して主は激しいしとの怒りをたたきつける<sup>(38)</sup>。イスラエル人は多くの苦悩を経験し、その都度神から救われたがそれを忘れることで彼らは神の怒りを買った。慈悲の結果を忘れることによりはるかに神の怒りが降りかかる<sup>(39)</sup>。神が示した慈悲を忘れ、人が神に無頓着になり、慈悲の絆に甘んじ、墮落していくのは神への最大の罪となる<sup>(40)</sup>。このようにストロングは説教で神の慈悲を決して忘

れないことを強調する。英国国教会説教家はジェームズ一世を賞賛するために毎年11月5日に説教を行ったが、ストロングの聴衆は「神がたたえられ、我々が神への賞賛を輝かしいものにするために集まっている<sup>(41)</sup>」。さらには神の栄光への賞賛を表し、神の前でへりくだるために集まっている<sup>(42)</sup>。これはジェームズ一世の奇跡的救出と王の神格化のための説教を聞きにくる人々とは異なる。ストロングの聴衆は火薬陰謀事件に対する神への感謝のために集まっているが、英国国教会説教では聴衆はジェームズ一世という個人崇拜を聞くために集まっている。ストロングはジェームズ一世の名前を持ち出すこともなく、また当然のことながら王の神格化を行うこともしない。王のための説教と神のための説教、これが英国国教会説教家の説教とピューリタン説教家の説教の大きな違いである。個人の神格化と非神格化の違いと言ってもよい。

「エズラ記」9章13-14節の興味ある点は「エズラ記」と火薬陰謀事件との関係である。「エズラ記」で問題になるのは「我々の悪しき行い」と「我々の大いなるとが」であり、「主の命令を破り、これらにくむべきわざを行う民と縁をむすんでよいでしょうか」という表現である。前者は火薬陰謀事件前までの英国人がこれまでに犯した罪への言及である。それがどのような罪であるかをストロングは明記しない。神は罪を犯した英国人に慈悲を示し、火薬陰謀事件から英国を救出してくれた。それにもかかわらず英国人は「以前の罪への逆戻り。」「エズラ記」の場合「逆戻り」はイスラエル人の雑婚への逆戻りであるが、これは火薬陰謀事件の場合何への「逆戻り」であろうか。奇妙なことに説教の中でストロングは説教が行われた時代の人物に言及することはしない。ストロングが説教を行ったのは1646年11月5日であるが、1月のデヴォンでの勝利、2月のトリントンでの戦い、4月のチャールズ一世のオックスフォード逃亡、5月のスコットランド軍への王の投降、7月の議会軍によるウスター占領、8月の王党派最後の拠点であるコーンウォールの守備隊の降伏が続き、議会派は着々と王党派を追い詰めていく。特に議会派にとっての大きな事件はチャールズ一世の投降であろうが、ストロングはこれに言及することはない。ストロングが「以前の罪への逆戻り」によって何を意味しているのかははっきりしない。これを解く鍵は14節の「われわれは再びあなたの命を破って、これらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか」にある。「憎むべきわざを行う民と縁を結ぶ」とは何を言っているのか。「エズラ記」には以前の罪へ戻ることへの「重大な心底からの嫌悪」が含まれているとストロングは言う。「エズラ記」の場合以前に犯した罪とは雑婚への逆戻りであり、罪を繰り返すイスラエルをストロングは“back-sliding Israel<sup>(43)</sup>”と呼ぶ。それでは「エズラ記」の「憎むべきわざを行う民」を火薬陰謀事件とのからみで考えた場合、この「民」が事件を起こしたカトリック教徒であることは間違いない。ピューリタン革命との関連では「憎むべきわざを行う民」は王党派である。しかし、説教が火薬陰謀事件記念日説教であるので、「民」が事件を引き起こしたカトリック教徒と理解するほうがより妥当である。とすれば説教の主題は反カトリック教徒・反カトリック教会ということになる。火薬陰謀事件の凶悪さに衝撃を受けた王や議会はカトリック教徒について「彼らの信仰は派閥争い、宗教は反乱、実践は魂と肉体殺害」であると言い、その後英国ではもはやカトリック教に対する恐怖はないと思われたが、再びカトリック教が勢力を得てきた<sup>(44)</sup>。いわゆる英国国教会のカトリック化である。カンタベリー大主教ウィリアム・ロード (William Laud) が主導し、英国国教会が徐々に形骸的なカトリック教へ走り、真の宗教がその姿を失いつ

つあるとピューリタンは警戒心を強めた。1630年代である。しかし、それも1645年1月のロード処刑、カトリック教への傾倒が強まっていったチャールズ一世の1646年5月の投降、1649年1月の処刑へと続く、妻のカトリック教徒であるヘンリエッタ・マリア (Henrietta Maria) は1644年から1660年まで国内不在であったが、英国社会は脱カトリック教に向かう。ストロングが説教を行った1646年11月5日までにカトリック教会が再び英国内でその力を発揮しているという形跡はないが、ストロングが念頭に置いているのは長老派である可能性もある。長老派は独立派と違い、チャールズ一世処刑には反対したピューリタンの中でも保守的な派である。「にくむべきわざをおこなう民」は火薬陰謀事件との関連では事件の張本人のカトリック教徒であるが、ライバルの長老派も「悪しきわざをおこなう民」のなかに入る。しかし、ストロングは長老派については一言も発しない。説教でストロングは何度か“Reformation”という語を使用するが、これは「改革」であり、宗教改革である。とすればピューリタンと対立するのはカトリック教会ということになり、カトリック教会の影響からの完全な脱却こそがストロングの目指すところとなる。ピューリタンは「悪しきわざをおこなう民」=カトリック教徒と絶縁し、真のキリスト教を取り戻さねばならない。これはカトリック教化した英国国教会の脱カトリック教化を意味する。チャールズ一世のカトリック寄りの政策は革命を引き起こす一因にもなったが、彼はジェームズ一世からのカトリック大国スペインへ寄り添った政策を掲げた。何よりも妻のヘンリエッタ・マリアはカトリック教徒であった。さらにはチャールズ一世の政策は親カトリックであった。ストーン (Lawrence Stone) は次のようにチャールズ一世の親カトリック政策について述べる。

There was the clear and growing influence exerted over Charles by his Catholic Queen: the employment of Catholic laymen like Windebank in high ministerial offices; the amiable relations maintained with the Papacy, which was allowed to establish an agent in London; the pursuit of a foreign policy which seemed blatantly pro-Spanish and anti-Protestant; and the construction of a costly and ostentatiously Counter-Reformation baroque chapel in St. James's Palace<sup>(45)</sup>.

カトリック俗人の政府高官への登用等はいずれもチャールズ一世が英国内でカトリック教の復活を図っている印象を一般国民に植えつけることとなった。さらにチャールズ一世を追い込んだのはウィリアム・ロードのカンタベリー大主教への登用である。ロードのピューリタン弾圧、礼拝面での改革推進はチャールズ一世同様英国内におけるカトリックの復活を人々に印象付けることになった。ロードは何を行ったか。ストーンは次のように言う。

In the forms of worship, stress was on the revival of hieratic ritual and visual ornament, in ways which had not been seen for over sixty years. Communion tables were put back in the east end of churches and protected by altar rails; the erection of organs and stained-glass windows was encouraged; the clergy were ordered to use the surplice and the laity to kneel at the altar rails to receive the sacrament<sup>(46)</sup>.

一国の根幹である政治と宗教の両面で英国はカトリック教化の道を行っていた。ピューリタンは英国のカトリック教化を最も恐れた。何よりも英国のカトリック教化は手を切ったと思われたローマ・カトリック教が依然として背後で英国への影響力を行使し、英国はローマに従属することになる。だから同じくピューリタンのウィリアム・ブリッジ (William Bridge) はストロングよりも早くやはりロード派による国教会の変革について次のように言うのである。

Now the enemies that are risen up in our dayes are Apostatizing enemies, and therefore if they prevaile (which God in mercy forbid) are like to prove the sorest enemies that ever the English Sun did see; yea worse then the enemies of those *Marian* dayes; for in Queene *Maries* time we reade that here and there two, three, foure, or ten were brought forth to the stake, but should these enemies now prevaile, not two, or three, or foure, or ten, but three thousands, and foure thousands, and ten thousands would be led out together to be all massacred. In Queene *Maries* time though the parent dyed, the child did inherit his land; but now at once our lands, our liberties, our chideren, our Religion and we are all like to die together<sup>(47)</sup>.

ブリッジにあってローマ・カトリック教は「背教」の宗教であり、「最悪の敵」である。カトリック教の脅威のもと英国は瀕死の状態である。ブリッジは1647年11月5日の火薬陰謀事件記念日でも説教を行い、カトリック教の脅威について次のように述べる。

Witness the Mercy, and Deliverance of this day [Fifth of November]. When the Powder-treason was on foot, what a dark night of security had trodden upon the glory of our English day? Then did our strength lie fast asleep in the lap of Delli: What Pride? Oppression? Court-uncleanness? Superstitions, and Persecutions of the Saints then, under the name of Puritans? Neverthelesse he saved us, and our Fathers...I feare the hand of the Jesuite is too much among us at this day: but, O *England!* O *Parliament!* For ever remember the *Fift of November: The snare is broken, and we are delivered*<sup>(48)</sup>.

この説教はストロングの説教の1年後であるが、「傲慢や抑圧、宮廷の不浄、迷信、ピューリタンへの迫害」といったカトリック教の悪弊の英国への浸透に警戒心を強め、愛国心を奮い立たせようとしている。ところがストロングはブリッジのようにカトリック教を批判したり、チャールズ一世やロードのカトリック教寄りの態度を論じることもしない。ただストロングはカトリック教徒の罪として以下の7点を挙げる<sup>(49)</sup>。

- (1) カトリック教徒は権威主義におぼれ、本来の聖職者としての任務を放置する。
- (2) カトリック教徒は自らの私的な目的のために権力を使う。

- (3) カトリック教徒は自らの権威を下に身内のものを教会や国の名誉ある地位につける。
- (4) カトリック教徒の共通の悪は改革を嫌うことである。我々は教会や国家に多くの誤りを見ざるをえない。私的な配慮から改革を止めさせてはいけない。
- (5) カトリック教徒は自らの私的な関心が関係しないことには神への熱意がない。
- (6) カトリック教徒は牧師に反対する。
- (7) カトリック教徒は宗教と信心深さに反対して陰謀を企む。

カトリック教の権威主義、権力の私的乱用、権威を利用しての縁者びいき、伝統にすぎたの改革嫌悪、カトリック教批判の牧師反対、そして何よりもストロングが警戒したのはカトリック教徒の陰謀の企みである。英国のどんな身分の卑しい人でも最も偉大な人と同様国家の共通の「正義」へ関心を抱いているがカトリック教会には「正義」への関心はない。すべての人に速やかに正義を行えと述べたあとストロングは次のように言う。

Let it not be said that the attendance for justice is the greatest oppression; and many rather content themselves to lie down under the burden, then seek a remedy, the seeking whereof they know will be worse then the disease....<sup>(50)</sup>

“the attendance for justice”とは正義のためにカトリック教会を敵に回し、裁判も辞さないことを言っているが、それを苦痛として避けるような態度は絶対にあってはならない。しかし、現状は多くの人は治療よりも重荷の下で横になることに満足し、治療を求めることは病気よりも悪いことを知っている。「治療」は社会の改革である。その改革に熱意を示さず、現状がどんなに劣悪であっても現状改善を求めることをせず、改革に消極的姿勢を示す人たちに現状改善への行動をストロングは強く促す。このあたりは独立派ストロングの社会改革への強い熱意が見られるところで、説教が最終的に目指すところは実は社会改革であると言えよう。ところがストロングはそれははっきりと示すことはしない。ストロングは神の慈悲と過去の悪への逆戻りを強調するが、実は慈悲を胸に秘め、過去の悪へ逆戻りしないことによって社会改革を前進させようとするのである。社会改革のためには真の宗教に不必要なものを捨て、主の神殿を建て、欠けている神の布告を立て、「キリストの家の家具」を持ち込み、自尊心を脇に置く必要がある<sup>(51)</sup>。ストロングの説教時においても多くの人が「右手に獣のしるし<sup>(52)</sup>」を受け取っていることを見てきている。真の宗教と宗教心を人々から奪おうとしているカトリック教徒への痛烈な批判である。彼らは本来の務めを忘れ、俗事において権力を見せつけることに躍起になる。火薬陰謀事件において王殺害を図ったジェズイットはその典型である。神のために働くべき彼らは自らの地位向上のために奔走する。ストロングの結論は今、英国の受難の時代において火薬陰謀事件で示された神の慈悲の祝賀が「神のために偉大なことを行うためにあなた方の手を強くしてくれる<sup>(53)</sup>」ことへの願望である。「神のために偉大なことを行う」とは何か。まぎれもなくこれは一方では英国国教会の脱カトリック教化であり、他方では脱カトリック教を成し遂げたうえでの英国社会の変革である。火薬陰謀事件日に示された慈悲により神はあなた方を獲得してくれた。そのお返しにあなた方は神に向かわねばならない<sup>(54)</sup>。「神に向

かう」とはカトリック教の形骸化した神ではなく真の神を求めることである。「あなた方はあなた方自身の身ではない。キリストの愛があなた方をかりたてている<sup>(55)</sup>」。もしかりたてなければ神は怒り、神の愛の甘美さを味わいながらも神の怒りを恐れることになる。なぜなら神の怒りは死よりも悪いからである。火薬陰謀事件を引き起こしたカトリック教徒は以来ずっと「彼らの策略であなた方を悩ませてきている。そして前よりもより危険なより残酷極まる方法で国会という名誉ある国会議事堂の爆破を試みてきている。でもこれまでは主が我々を助けてくれた<sup>(56)</sup>。「キリストの愛」によって何にかりたてられるのか。英国の脱カトリック教化へのかりたてであることは明らかである。それを行わなければ「神の怒り」が待っている。脱カトリック教化は何が何でも実行せねばならない責務となる。ストロングは最後に「サムエル記上12：24」から「あなたがたは、ただ主を恐れをつくして、誠実に主に仕えなければならない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを考えなければならない<sup>(57)</sup>」を引用する。主に仕えることによって神の恩寵を得る。逆に主への背信は「あなたも王」も滅ぼす。神がなされた「大きいこと」は主に誠実に仕えた結果であり、火薬陰謀事件の場合は事件の失敗である。主に恐れをもって尽くした結果が英国の事件からの救出である。火薬陰謀事件を起こしたカトリック教徒は心を尽くして神に仕えてこなかったことを示している。ストロングは、彼らがいかに宗教の名に借りて反宗教的な行為を重ねているかを明らかにする。ここまでくればストロングが「エズラ記」9章13-14節を説教の冒頭に掲げた理由は理解できよう。「悪しきわざをおこなう民」はカトリック教徒である。火薬陰謀事件の張本人のカトリック教徒・カトリック教会を説教で批判することがストロングの説教の隠れた意図であった。その点では英国国教会説教家と同様である。しかし、彼らと違い、ストロングは火薬陰謀事件説教で最も重要なジェームズ一世個人への賞賛を行うことはしない。ジェームズ一世の名前すら説教には出てこないのはストロングの王に対する特別な意識の表れであろう。独立派ストロングからすればジェームズ一世賞賛はありえない。事件を解決してくれたのはあくまでもジェームズ一世ではなく神、神の慈悲である。ストロングの説教は革命がいまだ進行中のなかでの説教である。ストロングは革命については一言も述べていないが、革命についても神に誠実に仕えれば神は慈悲を示し、議会派を窮状から救い、革命を成功に導いてくれることを暗示している。

## 2-5 むすび

ストロングは説教のなかで社会情勢についてはほとんど話さない。説教時前後の人物も説教には現れない。「英国」という言葉も数回しか現れない。しかし、説教をよく読んでみるとストロングは英国社会へ言及していることがわかる。説教の終わり近くでストロングは、「神があなたの前で追放した人たちは宗教と敬神の力に企みごとをした。この点で彼らと縁を組むな<sup>(58)</sup>」と言う。「神が追放した人たち」「彼ら」がカトリック教徒であることは言うまでもない。「宗教と敬神」への企みが火薬陰謀事件であることも明らかである。ストロングは言葉を続けて次のように言う。

...a great part of Englands Interest lies in that Text, *Touch not mine Anointed, and doe*



*my Prophets no harme*<sup>(59)</sup>

ストロングは、英国の大部分の関心は「わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない」にあると言うが、これは「詩編」105章15節の言葉である。105章は主をたたえる賛美の詩で、アブラハムから出エジプト及びカナン定住までを歌っているが、イスラエル人が神によって導かれたと民族として歌われている。ここでストロングは“England”を使用していることに注目したい。ストロングは「彼ら（イスラエル人）はこの上ない窮境にあっても神から離反し、罪へ逆戻りすることはなかったということは神の民の榮譽であり、誇りであった<sup>(60)</sup>」と言うが、これは英国人についても言えることであった。ストロングにとって英国人はイスラエル人同様神に導かれている国民である。上の言葉は「神によって選ばれた民」としての英国人を意識した言葉である。説教時の英国社会の関心事が「わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない」にあるということは英国国教会に介入してくるカトリック教会に向かって言っていると解することができる。それは英国国教会をほっておいてほしいという気持ちであり、英国社会からカトリック教を排除したいという強い願望の表れでもあろう。英国がいまだにカトリック教の影響の下にあることに触れてストロングは次のように言う。

We are still under the command and power of the King of *Persia*; and great *men are given to change*, and if his minde change, he will soone reduce us in the same bondage and captivity in which we were; and we have enemies round about, that watch for our halting, and are daily studying accusations, and giving informations against us<sup>(61)</sup>;

ストロングは、我々はまだイスラエル人に帰国を許したペルシア王キュロスの命令と権力の下にあると言っているが、イスラエル人は帰国を許されたとは言え、まだキュロス王の下では「敗戦国民」であった。「エズラ記」9章9節では「われわれは奴隷の身でありませんが、その奴隷たる時にも神はわれわれを見捨てられず…」とあるようにキュロス王の下のイスラエル人は奴隷の身分であった。ここで注意を要したいのは、ストロングはキュロス王を論じているのではないということである。火薬陰謀事件のコンテキストでは「ペルシア王」は文字通り「ペルシア王」ではなく、ローマ・カトリック教の「教皇」である。英国の宗教界がいまだにカトリックの影響下にあることをストロングは言っているのである。ロードの処刑は1644年1月で、チャールズ一世の処刑は1649年1月であった。ストロングの説教は1646年11月5日であったからチャールズ一世はまだ存命中でローマ・カトリック教の国内での脅威は完全には払拭されていなかったが国民はローマ・カトリック教に対しては恐れを抱いていなかった。

we would have thought, there had been no feare of the growth and countenancing of Popery in this Kingdome to the endangering of all the truths of God, both in Doctrine and Worship; much less that ever a *Popish Army* should have been raised

in this Kingdome for the destruction of the Parliament<sup>(62)</sup>;

神の真理を危険に陥れるまでの国内でのローマ・カトリック教の増大、奨励に関しては何も心配はなかった、カトリック軍隊は国会の破壊のため国内で招集されるべきであったと考へなかつたであろうとストロングは言うが、英国内でのカトリック教の危険については重く考へなかつた。しかし、国内におけるローマ・カトリック教の問題は依然として存在し、チャールズ一世との戦いはまだ進行中である。また、ストロングは「我々の時代に多くの者が彼らの右手に獣のしるしを受け入れた<sup>(63)</sup>」と言っている。「ヨハネの黙示録」では「獣のしるし」は皇帝礼拝者が持っていたというが、ストロングは、カトリック教の国教会への介入の結果英国人がカトリック教の様々な礼拝、儀式を受け入れたことへ言及している。「我々の時代」という表現を使い、ストロングは説教時の英国に言及している。

ストロングは説教で当時の英国に言及してはいるが、それにしても火薬陰謀事件が英国を震撼させた事件であるにもかかわらず、事件について詳細に語ることをせず、また、英国社会についても多くを語らない。ストロングはもっぱら神の「慈悲」について語るだけである。聴衆のなかにはストロングが進行中の革命についてスパーストウ同様情熱をもって語ることを期待していた者もいたであろう。そのような人にとっていささか拍子抜けする説教であった。同じ「エズラ記」9章13-14節を説教の題材にしたスパーストウは革命の動向に言及し、その説教は聴衆を大いに奮い立たせるものであった。ところがストロングの説教は外界の世界にはまったく関係がないかのごとくひたすら神の慈悲と過去の悪への逆戻りの弊害を訴え、「悪しきわざを行う民」への警戒心を聴衆に訴えるだけである。1646年には議会派は各地の戦いで王党派に勝利を収め続け、チャールズ一世も同年5月にスコットランドに投降している。しかし、ストロングはこれらを説教で取り上げることはせず、独立派としての革命への闘志を見せることもしない。ひたすら神の慈悲を受けるにはどうしたよいかを述べるにとどまる。火薬陰謀事件の主犯であるカトリック教徒への批判においてもその度合いには英国国教会説教家に見られたような激しい嫌悪、敵意の姿勢は見られない。長老会派のスパーストウの火薬陰謀事件説教のほうがストロングの説教よりはるかにカトリック教徒への糾弾は激しく、熱がこもっている。このように考えるとストロングの説教はある意味では失敗作であると言ってもよい。火薬陰謀事件説教は事件への非難から王及び慈悲賞賛へと論が進展するが、ストロングの説教がそのテーマを慈悲の祝賀にしたことにより火薬陰謀事件説教としては中途半端な説教になったと考えられる。本格的に火薬陰謀事件を論ずれば当然のことながら最後にはジェームズ一世の救出へと移らねばならない。しかしながら、一人のピューリタンとしてジェームズ一世賛美は到底受け入れることはできない。ピューリタンはその革命を通して王政打倒を目指していたからである。説教においてジェームズ一世を扱うことを選ばなかつたストロングは、しかし、積極的に革命を支援する言葉も発しない。革命を後押しする表現も見られるが、スパーストウのように熱っぽく語ることはしない。静かな説教である。神の慈悲というテーマを幾分抽象論的に論じているストロングに革命への傍観者としての一面を見る気がする。

ストロングの説教の最大の欠点は「適応」(Use)である。適応とは説教の冒頭に挙げた聖書の一節を事件に適応し、事件を批判することを言う。英国国教会説教家の火薬陰謀事件説教では彼らは危機的状況にある人物が奇跡的に神から救出される事件を説教の冒頭

に掲げ、それを火薬陰謀事件とジェームズ一世に適應し、聖書からジェームズ一世を擁護していた。ストロングの場合聖書の一節は「エズラ記」9章13-14節であった。この一節を事件に適應したらどうなるか。13節の「我々の悪しき行いと大いなるとが」は火薬陰謀事件に適應したらどうなるのか。この一節は事件直前の英国国民についてではなく、これまでの英国国民一般の熱意を欠く神への態度を指していると考えられる。ところがストロングは「悪しき行いととが」が何を意味するのかについては何も語ることはしない。同じく13節の「不義」にもかかわらず神は「不義よりも軽い罰をくだして、このように残りの者を与えてくださった」。「このように残りの者」は“such a deliverance as this”である。“deliverance”は「救出」であり、これは火薬陰謀事件ではジェームズ一世等の事件からの救出である。火薬陰謀事件との関係で言えばこの「救出」こそが説教の主題となるべきであるが、ストロングは「救出」について詳細に論じることはしない。14節の「にくむべきわざを行う民と縁を結ぶ」は火薬陰謀事件に適應すれば「にくむべきわざを行う民」がカトリック教徒であることは明らかである。後半は神の命令を破ることからの神の怒りについて書かれているが、「神の命令を破る」は「にくむべきわざを行う民と縁を結ぶな」という「神の命令」を破ることであるが、これは火薬陰謀事件を引き起こしたカトリック教徒の国内における存在である。その存在が英国国民にとってはなお脅威となりつつあったことへの懸念である。これは火薬陰謀事件後のことで事件とは直接火薬陰謀事件とは関係がない。「エズラ記」9章13-14節の火薬陰謀事件への適應はこのように考えられるが、ストロングはこの適應を説教で論ずることはしない。いずれにせよ火薬陰謀事件日における説教としては迫力に欠ける説教となっている。それも事件の被害者ジェームズ一世を論ずるのではなく、あくまでも事件を解決してくれた神の「慈悲」が説教のテーマとなっているからである。同じ「エズラ記」9章13-14節を説教のテーマにしたスパーストウの説教と比べるとやや劣る。具体性に欠け、抽象論的に「慈悲」をストロングは論じているからである。しかし、両者に共通したテーマもある。それは両者とも「慈悲」を論じていることである。スパーストウもジェームズ一世の名前を説教に書くことはしなかったが、事件を解決してくれた神の慈悲には最大の賛辞を送っているのである。神の慈悲がなければ事件はカトリック教徒の思いのままに終わったであろう。神の慈悲により火薬陰謀事件から救出されたにもかかわらず英国は再びローマ・カトリック教を自国に取り入れようとしている。これをストロングは以前の罪への逆戻りとして批判した。一方で神の慈悲を賞賛し、他方で神の慈悲を帳消しにするようなカトリック教へ批判を向けている。チャールズ一世、ロード大主教の主導により英国は再度カトリック教化へ歩もうとしている。ストロングはこれに断固として反対した。ピューリタンとしてピューリタンの敵であるカトリック教を批判するのは当然であり、その批判はやがてチャールズ一世の処刑に至る。ストロングの説教は火薬陰謀事件記念説教としては十分説得力ある説教とはなっていない。聴衆はピューリタン寄りの人が多かったと想像されるが、それにしても迫力に欠ける説教である。火薬陰謀事件であるゆえ本来ならば事件の最大の被害者ジェームズ一世を論じ、彼の奇跡的な救出を説教に取り入れなければならないが、そうすると最終的にはジェームズ一世個人の賞賛に説教は移っていかざるをえない。しかし、独立派としてストロングはジェームズ一世賞賛は決してあってはならない。ピューリタン革命のそもそもの目的はチャールズ一世打倒であったからである。だからストロングは説教の主題を神の慈悲と以前の罪への

逆戻りとし、極力ジェームズ一世に触れることを避けた。そうすることによって説教でのジェームズ一世賞賛を論ずる必要性がなくなったのである。この点が、また、英国国教会説教家の火薬陰謀事件記念説教との大きな違いであった。英国国教会説教家は体制擁護派で、彼らはジェームズ一世を最大限擁護しなければならない。しかし、ストロングはピューリタンで、ピューリタンは反体制派である。反体制派としてジェームズ一世王朝、ひいてはチャールズ一世王朝を批判するのは当然のことである。不思議なことにストロングの説教にはジェームズ一世もチャールズ一世もその他の革命に関わる人物も登場しない。当時の社会情勢についても詳細に描きもしない。ただ神の慈悲と過去の罪への逆戻りを扱うだけである。スパーストウのように革命を後押しするところがストロングの説教には全くないかと言えばわずかであるがあることはある。説教の後半でストロングは次のように言っている。

And let not only the rubbish be cast out, but let the Temple of the Lord be built; there is in Reformation an Astructive part as well as a Destructive: Let all the Ordinaces of God that are wanting be set up, and all the furniture of Christs house brought in, and let every one laying selfe-respects aside...<sup>(64)</sup>

「くず」の追放はローマ・カトリック教の英国からの追放であり、「主の神殿」の建設はやはりローマ・カトリック教の教会ではなく脱カトリック教化後のピューリタンが理想と考える教会である。英国国教会には欠けている「神の儀式的設立」は形骸化したカトリック教の儀式であり、「キリストの家の家具」はカトリック教の儀式に必要なものとは異なる真の宗教上の聖具等である。「自尊心を捨てる」はカトリック教徒の神よりは自らを重視する姿勢である。このようにストロングは説教の随所でカトリック教徒には真の宗教心が欠如していることを批判している。「エズラ記」9章13-14節の前半では罪以下の罰を神は下し、イスラエル人を救出してくれたことへの神への感謝、後半では過去の罪への逆戻りからイスラエル人に憎むべきわざを行う民と縁を組むことがあってはならないと言っているが、これらはいずれも火薬陰謀事件に適応すれば事件においてジェームズ一世を神が救出してくれたことと再び英国内で影響力を強化しているカトリック教徒と手を組むことの危険性に適応される。ストロングの説教は最終的には英国社会の改革へ向けられている。徐々にカトリック教化していく英国を本来の姿に戻すためにはカトリック教の排除こそがまず最初に行われるべきで、それによって英国社会はカトリック教から手を切り、自らの道を歩むことができる。スパーストウのようにはっきりと英国社会の改革を押し進めた説教と違い、ストロングの説教は具体性に欠け、幾分穏やかな説教となっている。ピューリタンによる火薬陰謀事件説教としてストロングは火薬陰謀事件における神の慈悲を特に重視し、その神の慈悲がまた進行中の革命を勝利へとピューリタンを導いてくれることを確信している。そして革命の勝利のためには過去の罪への逆戻りは決してあってはならないとストロングは説くのである。

注

- (1) C. H. McIlwain ed. *The Political Works of James I* (New York: Russell & Russell, 1965), p. 281.
- (2) Ibid., p. 282.
- (3) Ibid., p. 282.
- (4) Ibid., p. 284.
- (5) Ibid., p. 283.
- (6) Ibid., pp. 283-4.
- (7) Ibid., p. 284.
- (8) Ibid., p. 284.
- (9) Ibid., p. 284.
- (10) Ibid., p. 285.
- (11) Ibid., p. 285.
- (12) Ibid., p. 288.
- (13) William Barlow, *The Sermon Preached at Paules Crosse, the tenth day of Nouember, being the next Sunday after the Discouerie of this late Horrible Treason* (London, 1606). Barlow の説教については、高橋正平『火薬陰謀事件と説教』（三恵社、2012）、pp. 1-21を参照。
- (14) これは1646年にロンドンで出版されており、本論で使用するテキストは1646年版である。
- (15) Strong, A2, A2R.
- (16) Ibid., p. 2.
- (17) Ibid., p. 15.
- (18) Ibid., p. 16.
- (19) Ibid., p. 17.
- (20) Ibid., p. 17.
- (21) Ibid., pp. 15-17.
- (22) Ibid., p. 8.
- (23) Ibid., p. 8.
- (24) Ibid., p. 8.
- (25) Ibid., p. 16.
- (26) Ibid., p. 16.
- (27) Ibid., p. 17.
- (28) Ibid., p. 3.
- (29) Ibid., p. 4.
- (30) Ibid., p. 3.
- (31) Ibid., A2.
- (32) Ibid., A2.
- (33) Ibid., A2.
- (34) Ibid., A2.
- (35) Ibid., A2.
- (36) Ibid., A2.

- (37) Ibid., A2R.
- (38) Ibid., A3.
- (39) Ibid., A3.
- (40) Ibid., p. 8.
- (41) Ibid., p. 8.
- (42) Ibid., p. 9.
- (43) Ibid., p. 19.
- (44) Ibid., p. 13.
- (45) Lawrence Stone, *The Causes of the English Revolution 1529-1642* (London and New York: Routledge, rep.ed., 2005), pp. 121-2.
- (46) Ibid., p.119. Charles Carlton は次のように言い、Laud はカトリック教徒であったと言っている。“While making him [Laud] many powerful enemies, the archbishop's against conversions won him few friends. His emphasis on stained glass windows, genuflecting, choirs, surplice, and the placement of the altar convinced many Protestants that he was quite literally a closet Papist who, as one London apprentice alleged, hung a crucifix in his private chamber. (Charles Carlton, *Archbishop William Laud* [London: Routledge & Kegan Paul Ltd, 1987], pp. 129-130.
- (47) William Bridge, *A Sermon Preached before the Honourable House of Commons* (London, 1643), pp. 10-11.
- (48) William Bridge, *England Saved with a Notwithstanding* (London, 1647), pp. 7-8, 29.
- (49) Strong, pp. 22-32.
- (50) Ibid., p. 26.
- (51) Ibid., p. 27.
- (52) Ibid., p. 31.
- (53) Ibid., p. 32.
- (54) Ibid., p. 32.
- (55) Ibid., p. 32.
- (56) Ibid., p. 32.
- (57) Ibid., p. 32.
- (58) Ibid., p. 31.
- (59) Ibid., p. 32.
- (60) Ibid., p. 19.
- (61) Ibid., p. 11.
- (62) Ibid., p. 13.
- (63) Ibid., p. 31.
- (64) Ibid., p. 27.